第Ⅲ章　調　　査

第１節　測量と地区割

調査区の設定

石神遺跡第１～４次調査は、いずれも既存畦畔で区画された水田を調査範囲とした。そのため調査区は不整形を呈する。第１次調査区は畦畔を挟んで南北２ヵ所に分かれ、南区は東西約35.5m、南北約25m、北区は東西約27.5m、南北約9.0mを調査範囲とし、調査面積はあわせて936㎡である。第２次調査区は第１次調査区の北区とも一部重複して、東西約42m、南北約40mを調査範囲とし、調査面積は1,182㎡（新規発掘部分は1,126㎡）である。第３次調査区は畦畔を挟んで第１次調査区の西隣に設定し、調査範囲は東西約55m、南北約30mで、面積は1,423㎡である。第４次調査区は第３次調査区の畦畔を挟んで北隣の水田に設定し、調査範囲は東西約54m、南北約30mで、調査面積は1,456㎡である。石神遺跡1990-１次調査は、第２次調査区北隣の水田に位置し、調査範囲は東西9.0m、南北5.0mで、調査面積は45㎡である。石神遺跡1996-１次調査は、第１・２次調査区のすぐ東側に南北に分けて調査区を設定し、北区は東西約1.2m、南北約7.2m、南区は東西約1.4m、南北約9.4mとし、調査面積は計21.8㎡である。第１次調査区の再発掘である飛鳥藤原第214次調査（以降、214次調査）は、第１次調査区の主に西半を中心に調査区を設定し、調査範囲は東西約20m、南北約23mで、面積は335㎡である。

測地系

2002年４月１日の改正測量法の施行を受け、2003年度から当研究所の発掘調査は日本測地系から世界測地系に移行した。本書で報告する各調査のうち、第214次調査を除いて、いずれも日本測地系に基づいて測量をおこなった。日本測地系から世界測地系への改算は、飛鳥藤原地域の座標変位量である、Ｘ座標＋346.5m、Ｙ座標－261.6mを日本測地系の値にそれぞれ加えれば可能となる[1)]。また標高は、東京湾平均海面を基準とする海抜高であらわす。なお、本書内の本文中挿図（Fig.）および巻末図版（PLAN）の座標数値は日本測地系で表示し、丸括弧内に世界測地系の数値を示した。

Tab. 1　調査基準点一覧

調査次数	大・中地区	基準点	測地系	基準点	X座標	Y座標	標高(m)	備考
石神１次	6AMD-U	№30・40	日本測地系	№30	-168,580.700	-16,334.040	—	1989年改測値に基づく再測、現在滅失
				№40	-168,579.470	-16,136.750	99.461	1989年改測値に基づく再測
石神２次	6AMD-U	№31・49	日本測地系	№31	-168,895.827	-16,415.481	101.030	1988年改測、四等三角点
石神３次	6AMD-U	№31・49	日本測地系	№49	-168,881.932	-16,334.140	102.780	旧座標値の補正値
石神４次	6AMD-U	№31・49	日本測地系					
1990-1次	6AMD-T	№29・31	日本測地系	№29	-168,575.081	-16,304.955	98.491	1988年改測
1996-1次	5AMD-U	№31・明日香村№04	日本測地系	明日香村№04	-168,983.283	-16,416.749	98.495	1996年奈文研改測による数値
第214次	5AMD-U	№31	世界測地系	№31	-168,549.309	-16,677.042	101.030	1988年改測、四等三角点

基準点測量　発掘調査では、調査区の近傍に平面座標および水準の基準点が必要なため、基本的には調査ごとに数点の基準点を設定している。第214次調査を除く、各調査で設定した基準点は、平面直角座標系第Ⅵ系（日本測地系）に基づいている。これら基準点を設定するにあたり、基準点測量の元となった測量点・水準点をTab. 1に示す。第1次調査の基準点測量では、1972年11月に設置の基準点・水準点No.30（現在は滅失）を起点として、1973年2月設置のNo.40につなぐ結合トラバースによって基準点を設定した。この測量時にはNo.31（四等三角点）およびNo.49（第1次調査区東南隅の仮設点）を接点とした。第2次調査では、先述のNo.49を起点、No.31を後視点とした開放トラバースによって、調査区西北隅に基準点を設置した。第3・4次調査ではNo.31およびNo.49を用いた三角測量によって、各調査区の中央北端に基準点を設置した。第1～4次調査の標高はいずれもNo.31からの直接水準移動による。

石神遺跡1990-1次調査では、第9次調査東辺に設置した基準点（1980年に設置した基準点・水準点No.29を起点、No.31を後視点とする開放トラバースにより設置）を起点とし、No.49を後視点とする開放トラバースによって、調査区西に基準点を設置した。標高はNo.49からの直接水準移動による。

石神遺跡1996-1次調査では、No.31を起点、明日香村設置の基準点No.04（1995年設置、座標値は1996年の奈文研改測値を使用）を後視点とした開放トラバースによって、直接調査区の四隅を設定した。標高はNo.31からの直接水準移動による。

第214次調査では、GNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法で調査区を設定した[2)]。標高はNo.31からの直接水準移動による。

なお、1988年12月におこなった三級基準点および水準点測量で、それまで使用していた座標値のいくつかに誤差があることが判明した。上記の基準点No.29およびNo.30・No.40もこれに該当し、調査時に作成した図面類の座標にも補正を加える必要が生じ、本書で報告する各図版の座標値は補正を加えた数値である。具体的には第1～4次調査では、X座標の数値を－0.1m補正しており（絶対値としては0.1mを加算）、Y座標および標高については、実用上支障をきたすような誤差はなく、補正を加えていない。石神遺跡1990-1次調査ではX座標に＋0.5m、Y座標に＋0.2m（いずれも絶対値としては減算）し、標高の補正は必要ない。また石神遺跡1996-1次調査は座標・標高ともに補正対象外である。

地　区　割　奈文研では1993年度末まで、条里制の遺存畦畔を基準とする地区割（以下、旧地区割と呼ぶ）によって調査をおこなってきた。本書で報告する第1～4次調査および石神遺跡1990-1次もこの旧地区割によって調査地区を設定している（Fig. 7）。旧地区割では約125m四方の条里畦畔の区画（1坪）を基本単位とし、南北3坪、東西6坪からなる計18坪分（南北約375m、東西約630m）を大地区として設定する。大地区名は、時代を示す数字1文字、遺跡の種別をあらわすアルファベット1文字、遺跡名／位置をあらわすアルファベット2文字の計4文字で表記する。この大地区を東西方向に3分割、南北方向に6～8分割した区画が中地区である。中地区には東北隅から順にアルファベットを付す。そして中地区をさらに3m間隔で分割した区画を小地区とする。小地区名は中地区のうち東南隅となる区画を起点のA01とし、北へアルファベットを、西へ数字を順に付す。以上を原則としつつ、実際には調査ごとに調査区の位置や形状に合わせて中地区を拡大して適用するなど、柔軟な運用をおこなってきた。そのため、特に

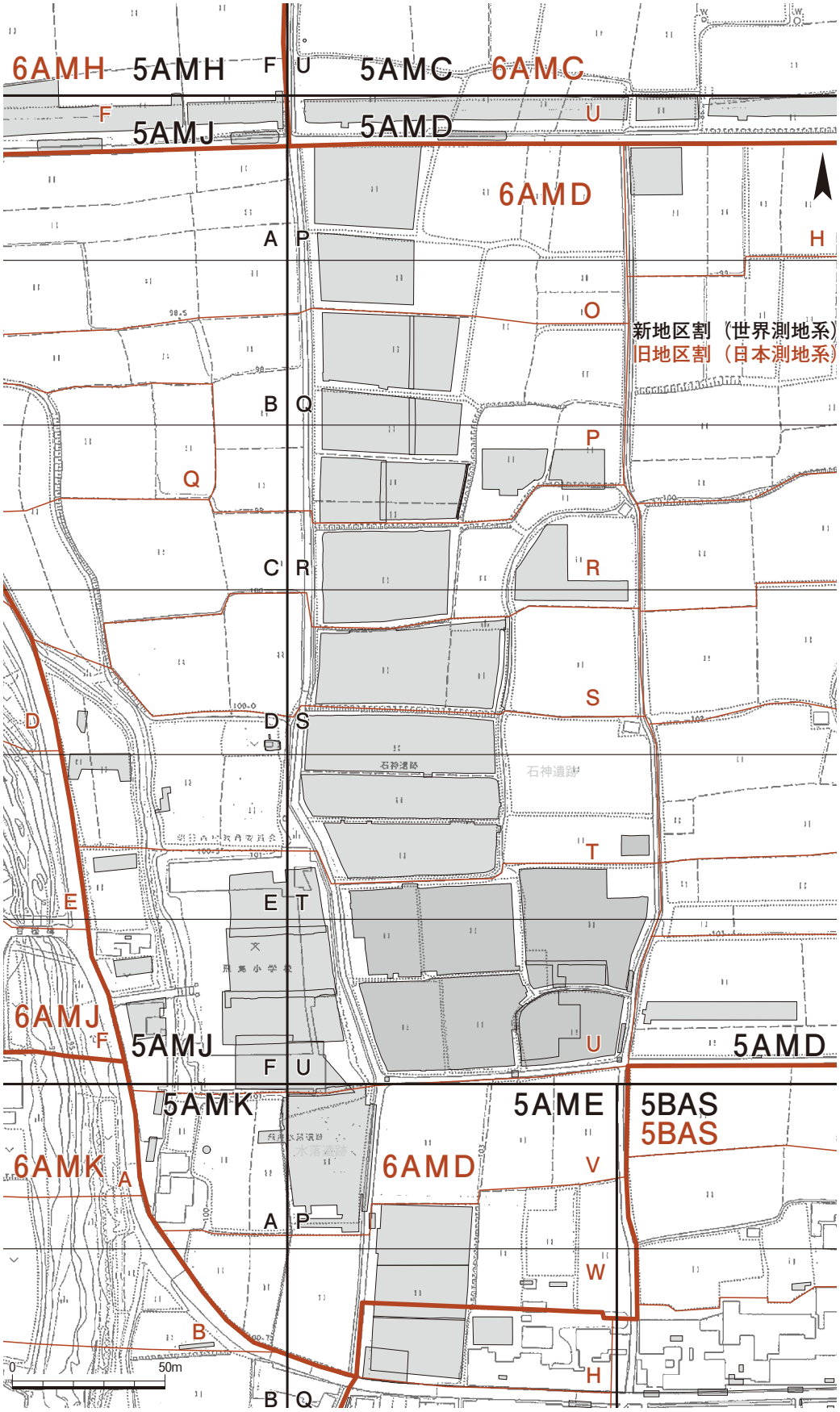

Fig. 7　石神遺跡大・中地区割図　1：2,000

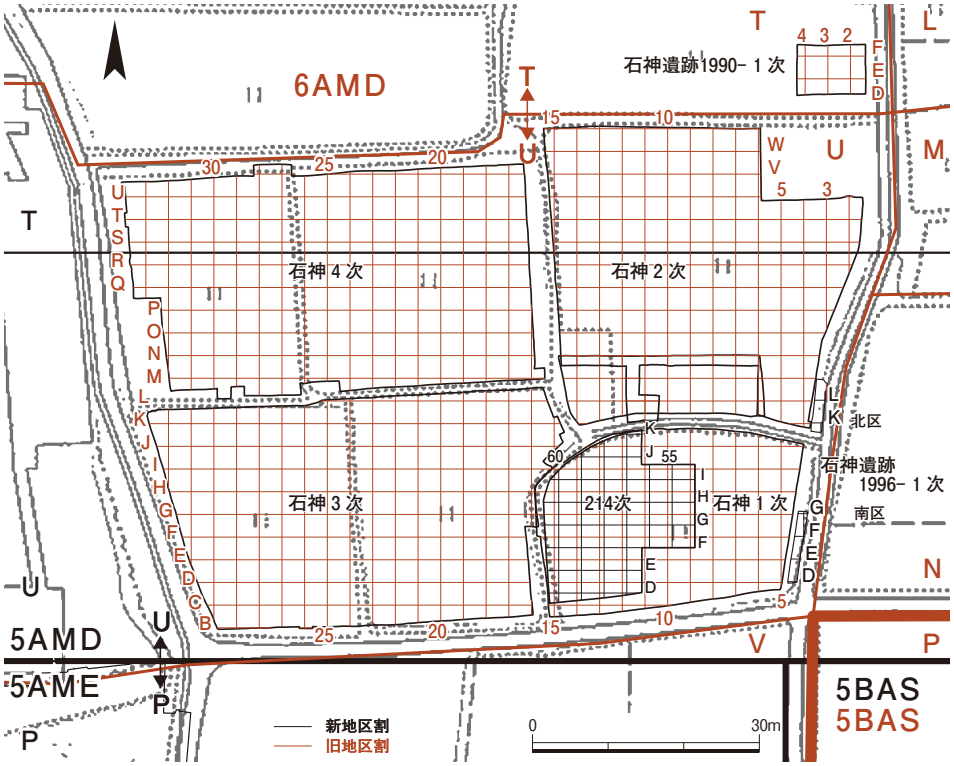

Fig. 8　第１～４次調査区周辺の地区割　1：1,000

調査区境界では、隣接する地区名が必ずしも一致せず注意を要する。

1994年度からは上記の旧地区割を廃止し、平面直角座標系（日本測地系）第Ⅵ系（原点：北緯36°、東経136°）に基づく新地区割に移行した[3]。地区の規模や配列は概ね旧来のものを踏襲しつつ、新地区割では平面直角座標系によって地区境界を定め、規格的なものとした。大地区は東西672m、南北324m、中地区は大地区を18分割した区画で、東西222mまたは228m、南北54mである。小地区は旧来の規模と同じく３m四方とする一方、東南隅の小地区名称をA10に改めた。2002年の世界測地系への移行の際には、両座標系に基づく方眼にずれが生じ、日本測地系に基づく小地区の東南隅の点から南へ1.5m、東へ0.6m移動した別の点に、世界測地系に基づく同名の小地区東南隅が設定されることとなった。なお、石神遺跡1996-１次（日本測地系）および第214次調査（世界測地系）は新地区割で調査をおこなっている。

本書で報告する第１～４次および石神遺跡1990-１次調査区の旧地区割、石神遺跡1996-１次および第214次調査区の新地区割をFig. 8に示す。旧地区割における第１～４次調査区の大地区－中地区は6AMD-U、石神遺跡1990-１次は6AMD-T、新地区割における石神遺跡1996-１次および飛鳥藤原第214次調査区は5AMD-Uである。

1）詳細については、内田和伸・小澤 毅・金井 健「測量法改正（世界測地系導入）に伴う測量業務の対応」（『紀要2005』22-23頁）を参照されたい。

2）奈文研でのGNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法の導入と座標補正に関する検証については、「発掘調査におけるGNSS測量と座標補正について」（『発掘調査報告2023』例言）を参照されたい。

3）奈文研「飛鳥・藤原地域における地区設定基準の改定」『藤原概報24』1994年。

第２節　調査の概要

Tab. 2　調査一覧

調査次数	調査地区	地番	調査期間	調査面積
石神第１次	6AMD-U	飛鳥287番地	1981．9．3 ～ 1982．1.30	936.0㎡
石神第２次	6AMD-U	飛鳥282・283番地	1982．4.21 ～ 1982.10.23	1,182.0㎡
石神第３次	6AMD-U	飛鳥285-1・286-1番地	1983．7.18 ～ 1984．2.20	1,423.0㎡
石神第４次	6AMD-U	飛鳥284-1番地	1984．7．9 ～ 1985．5．7	1,456.0㎡
石神遺跡1990-１次	6AMD-T	飛鳥281番地	1991．1.28 ～ 1991．2.15	45.0㎡
石神遺跡1996-１次	5AMD-U		1996.12．2 ～ 1996.12．3	21.8㎡
飛鳥藤原第214次	5AMD-U	飛鳥287番地	2023.12．6 ～ 2024．3.15	335.0㎡

A　第１次調査

奈文研による石神遺跡の発掘調査は、旧飛鳥小学校の東側に位置する小字石神の水田から始まった。この地は明治35・36年（1902・1903）に石造物が出土したことで知られ、昭和11年（1936）には石田茂作がその出土地付近の発掘調査をおこなっている。いっぽう、飛鳥小学校とその周辺を「浄見原宮」に当てる喜田貞吉の学説以来、一帯を飛鳥浄御原宮の推定地とする見方は根強く残っていた。奈文研による発掘調査でも、第２次調査までは「飛鳥浄御原宮推定地の調査」とされており（『藤原概報12』『同13』[1]）、石神遺跡とその周辺を飛鳥浄御原宮の推定地に当てるという学説を強く意識したものであった。

ところが昭和40年代以降、石神遺跡の近隣で発掘調査が進むにつれ、遺跡の見方は大きく変化することになる。まず、昭和47年（1972）には飛鳥小学校の南側で貼石に囲まれた大規模な礎石建物が見つかり、昭和51年（1976）には飛鳥水落遺跡として国史跡に指定された。また、昭和52年（1977）の発掘調査で飛鳥寺の北面大垣が確認されたことを受け、小字石神が飛鳥寺西門の前を通る中ツ道と、壬申の乱の記事に登場する「飛鳥寺北路」との交差点付近にあたると想定されたことから、新たな視点による全面的な調査が必要になったという（『藤原概報12』55頁）。そこで第１次調査では、石造物が出土した水田の全域とその北側の水田（282・283番地）において、昭和11年の発掘調査を再確認することが主要な目的とされた。なお、「石神遺跡」という遺跡名称は、昭和57年当時は小字石神の水田に因んだ仮称にすぎなかったが、第３次調査以降は遺跡の名称として定着しており、『奈良県遺跡地図』では「石神遺跡（14D-0028）」および「須弥山像・道祖神像出土地（14D-0029）」として登載されている。

第１次調査では石田茂作による発掘調査の輪郭と、彼が発見した「石敷広場」および石組溝とを再確認し、所期の目的を果たすとともに、飛鳥時代の掘立柱建物SB301・SB325、東西塀SA311、南北溝SD321および東西溝SD322などを検出した。調査区の東半では、平安時代の土坑SK320、古墳時代の竪穴建物SI315、弥生時代の土坑SK304・306等を同一面で検出している。調査の結果、石田が発見した石組溝はSD330・331およびSD334・335として再認識され、「７世紀前半～中葉の遺構」とされたのに対し、石敷SX327は７世紀後半の遺構で、SD335等を埋め立てた後に敷設していることが判明した。つまりこの時点で、調査区西半の遺構は層位的に区別できることが知られ、Ａ期（７世紀前半～中頃）とＢ期（７世紀後半）とに大別されることとなった。ただし、SX327は掘立柱建物SB400の南石敷であることが第２次調査で判明するが、

このときはその柱穴を認識していない。また、第１次調査では東西大溝SD347を検出していなかったが、東側隣接地の発掘調査（飛鳥藤原第209次）で見つかった東西溝SD4610がこれに当たると考えられる。したがって、SD347・4610は石神遺跡の東方から延びてきて第１次調査区を横断し、その西側で北へ曲折する大溝であることが近年確定した。

このほか、床土面から掘り込んだ穴の底で、花崗岩石造物の痕跡SX344・350を確認したことで、明治35年の石造物出土地点を２ヵ所で特定している。

B　第２次調査

石神遺跡の第２次調査は、前年度における第１次調査のすぐ北側の水田で実施した。第１次調査の範囲を超えて北へと延びる石組溝SD335を追跡するために、この水田が選定されたものと考えられる。発掘調査の結果、７世紀代の遺構を検出し、これらを古いほうからＡ期とＢ期とに大別した。Ａ期の遺構（７世紀前半～中頃）にはSD335・435と石組小溝SD490、素掘溝SD365・500、掘立柱建物SB450、礫敷SX430等が、Ｂ期の遺構（７世紀後半）には掘立柱建物SB400とこれを取り巻く石敷SX359・370・401、石敷の縁石SX358等がある。

７世紀後半の南北棟であるSB400は南北６間×東西３間で、その南端が前年度の第１次調査区にかかることが判明したため、一部を再発掘して柱穴を確認している。その結果、石田茂作が最初に発見した「川原石群の東方の石敷広場」は、SB400南辺の石敷SX327にあたることが新たに判明した。

SB400等の下層では、Ａ期の基幹水路であるSD335が曲折してSD435となり、さらに東へと延びていることが判明した。また、この石組溝と併存するのがSB450と石敷SX370である。これらの遺構群は黄灰色の整地土に覆われ、Ｂ期の建物SB400を取り巻く石敷SX370・401等の下位に埋没していたことがあきらかとなった。こうした層位的な検出事例から、石神遺跡では７世紀中頃までの建物や溝が廃絶したのち、それまでの土地利用を一変させる大改作がおこなわれたことを再確認した。なお、第２次調査では、石田茂作のトレンチ調査が石組溝SD335を追跡するかたちで、飛鳥282・283番地の水田まで延びていたことを確認した。このためSD335は、その大部分がすでに発掘済であったが、SD335の未発掘部とSD435からは７世紀前半の土器が出土している。

このほか、おもに調査区の東半で弥生時代・古墳時代の土坑群を検出したほか、調査区中央部から西半にかけて平安時代の掘立柱建物SB440・459、塀SA420と、中世の掘立柱建物SB460、塀SA461・462等も検出している。

C　第３次調査

第１・２次調査では、７世紀中頃の遺構と後半のそれらとが重複していることが判明し、７世紀後半には大規模な整地をともなう大改作をおこなっていたことがあきらかとなった。またこの頃、奈文研では石造物が「この付近に設けられた園池的施設に関連するもの」と考えており[2)]、その園池的施設、ないしは「饗宴施設」の存在を第１・２次調査地の西方に想定していたことと、さらには隣接する水落遺跡との関係をあきらかにする必要から、第３次調査は第１次調査地のすぐ西側に位置する水田において実施することとなった。

調査の結果、７世紀前半から中頃の遺構として東西塀SA600、掘立柱建物SB530・620、石組溝SD331・332・333・522、石敷SX526・550・700等と、７世紀後半の遺構として東西塀SA560・581、掘立柱建物SB510・520・580、方形石組遺構SX540等、そして７世紀末頃の掘立柱塀SA610・622・670、井戸SE650、東西大溝SD347および南北大溝SD640ほか多数の土坑を検出した。これらのうち、とりわけ重要なのはSA600である。この掘立柱塀は立柱後に基壇を築成し、基壇縁に化粧石を並べたもので、柱掘形は一辺1.8m前後と大きく、柱間寸法も広い。そこで調査時には、SA600の規模や構造から見て、これより南側が水落遺跡の区画に属し、北側が石造物の出土地を含む饗宴の場に関連した施設にあたると考えられた。また、この区画塀を踏襲した掘立柱塀SA560と、第１次調査で検出していたSA305とは柱筋が一致していることから一連の塀であるとされ、その検出総長は約80mにおよぶとされた。

このほか、調査区東半で検出した東西溝SD605と東西大溝SD347は、北へ折れてそれぞれ南北溝SD621・南北大溝SD640となり、さらに北へと延びていることが判明した。

このように第３次調査では、石神遺跡の南限を画する大垣の発見という重要な成果が上がった。しかしその一方で、飛鳥京跡（飛鳥板蓋宮推定地）の上層遺構を飛鳥浄御原宮に当てる説[3)]を考慮したためか、石神遺跡を「飛鳥浄御原宮推定地」と呼ぶことはなくなり、その発掘調査も斉明朝における「饗宴施設」の性格究明が主目的となっていった。

D　第４次調査

前年度の第３次調査におけるSA600の発見により、「饗宴地区」の南限が確定したことを受け、以後の発掘調査は第９次調査（平成２年度）まで、水田を１枚ずつ北上してゆくかたちで進行することとなった。第４次調査は第３次調査区北側の水田において、「饗宴地区」に属する各時期の遺構確認と、それらの実態究明とを目的として実施された。

調査の結果、７世紀中頃の掘立柱建物SB745・750・810・811、井戸SE800、石組溝SD332・730等と、７世紀後半の建物SB735・736・820およびSB742・770、掘立柱塀SA670・775およびSA732・751、そして「藤原宮期」の建物SB830、塀SA780・781、南北溝SD621および南北大溝SD640などを検出した。このうち、調査区の北端近くで検出したSE800は石敷と側石とをともなう井戸で、その東西には大型建物SB750とSB810とを配していることから、饗宴地区の重要遺構と認識された。井戸枠内出土土器は当初、飛鳥Ⅲに属するとされたが、その後の検討では飛鳥Ⅰから同Ⅲまでの土器を含むと考えられるようになった[4)]。また、第４次調査ではＣ期（藤原宮期）の整地土である「含炭褐色土」と、Ａ−２期の整地土である「山土を含む灰褐色土」が部分的に残存していた（『藤原概報15』55頁）。第１次調査からの層位的知見を総合すると、石神遺跡では少なくとも２度にわたり、大規模な整地をともなう改作がおこなわれたことが、すでに知られていたのである。

Ａ期〜Ｃ期の時期区分

第４次調査からは、検出した遺構群を古い順からＡ期〜Ｃ期に大別し、Ａ期を３小期（Ａ−１・Ａ−２・Ａ−３期の各期）に細分するという時期区分を採用した。この枠組はその後も修正を受けつつ、第21次調査まで受け継がれた。ただし、第４次調査時はＡ−１・Ａ−２期を斉明朝、Ａ−３期を天武朝に当てたが、その後の区分案ではＡ期を斉明朝、Ｂ期を天武朝に変更している。

E　石神遺跡1990-１次調査

農小屋新築にともなう事前調査として、平成３年（1991）に実施した。調査地は第２次調査区の北側にある水田の東端である。調査の結果、黄褐色砂質土の上面において、７世紀中頃の東西掘立柱塀SA1460・1465、東西溝SD1461などを検出した。このうち、東西塀SA1465は第２次調査で検出した石組溝SD435の約８m北に位置し、調査区外へと東西に延びている。その北側に位置するSA1460とあわせ、石神遺跡東南部の区画施設と考えられる。

F　石神遺跡1996-１次調査

農道の補修工事にともなう事前調査として、平成９年（1996）に実施した。調査地は第１・２次調査地のすぐ東側で、北区と南区とに分かれているが、顕著な遺構は検出できなかった。

G　飛鳥藤原第214次調査

この発掘調査は本書の執筆陣からなる調査班が、本書を刊行するために立案した、第１次調査区の再発掘調査である。

前述のとおり、第３次調査では石神遺跡の南限とみられる東西掘立柱塀SA600と、その後身の区画施設であるSA560を新たに検出するなど、大きな成果を挙げた。ところが、その東側隣接地にあたる第１次調査区ではSA600の柱穴列を検出していなかったため、石神遺跡の範囲を確定するために、この南面大垣を新たに確認する必要が生じていた。近年、本書の作成業務を進めるなかで、この課題の解決が急務となったことから、令和５年度に土地所有者をはじめとする地元のご理解を得たうえで、再発掘に着手した。調査区はSA600等の確認に必要な範囲を中心とし、第１次調査区の西半分をおもな調査対象とした。

調査の結果、SA600が石組溝SD335の手前で北へと折れていることを確認し、その曲折点が７世紀前半における石神遺跡の東南隅にあたることが確定した。その角にある柱穴は、かつて石田茂作が「井戸」とみなし、第１次調査時にSE340と称したもので、すでに掘り抜かれた部分は柱抜取穴にあたる。SA600は併存するSD335出土土器の年代観（令和５年時点）に基づき、皇極朝以前に遡ることとなり、A-３期遺構群よりも古い段階の区画施設であると考えられるようになった。これにくわえて、SA600の曲折点にあたる柱穴から東へと延びる東西塀SA4645と、これを付け替えたとみられるSA560も新たに検出し、７世紀前半における石神遺跡の区画が、第１次調査区の東側へと拡張されていたこともあきらかとなった。なお、これらの柱穴が第１次調査時に検出できなかったのは、流路NR310の堆積物である灰色砂礫が広く残存していたためであることも、この調査であきらかになっている。

第214次調査は、報告書作成の過程で気付かれた課題をよく検討し、綿密な計画のもとで実施した再調査であり、石神遺跡の時期区分や遺構変遷を見直すための重要な契機となった。

１）第１次調査は、隣接している水落遺跡第２次調査（1981年９月～12月）とは同時に進行していた。
２）『藤原概報13』1983年、19頁を参照。
３）奈良県立橿原考古学研究所『飛鳥京跡二』奈良県教育委員会、1971年。
４）西口壽生「石神遺跡SE800出土土器の再検討」『年報1997-Ⅰ』。

第３節　調査日誌抄

以下の調査日誌抄は、石神第１～４次調査と石神遺跡1990-１次調査・飛鳥藤原第214次調査の抄録である。第１～４次調査の日誌抄では、調査時の日々の解釈をなるべくそのまま載せた。しかし第209次・第214次調査により、第４次調査以前の遺構・層位に関する認識を見直し、そのときに付与した遺構番号を修正する必要が生じている。また、当時の日誌では同じ土層や遺構の表記揺れが少なくない。そこで以下、読解の参考とすべく、記事の一部に注釈を付すこととした。

A　第１次調査　1981年９月３日～1982年１月30日

9.3　発電機設置し、コンベヤ設置ののち東から耕作土の除去開始（06ラインまで）。

9.4　07ラインまで耕作土を除去。午後は降雨のため中止。

9.5　09ラインまで耕作土を除去。

9.7　13ラインまで耕作土の除去を進める。フェンス設置。

9.8　耕作土の除去完了。床土を半スコ掘り下げ、西端から「石田トレンチ」の検出開始。Gラインに東西畦を、10ラインに南北畦を設定。

9.9　西から床土除去に着手するが、降雨で中止。

9.10　床土を半スコ掘り下げて石田トレンチを検出（12ラインまで）。床土は黄味の強い灰褐色土だが、石田トレンチ埋戻土は茶味のある灰褐色土で小礫・砂を含んでいる。

9.11　床土の除去と石田トレンチの検出を東へと進める。予想以上に方々を掘っている。南北トレンチでは石組溝SD335の側石天端にあたる。

9.12　雨天中止。１：200の現況図と『飛鳥随想』に掲出の実測図とを比較したところ、SD335の長さなどが一致せず。石田氏の図は調査後に作図か。

9.14　08ラインまで石田トレンチの検出。UH・UI08区でトレンチ底まで掘り下げ、SX327を確認。

9.16　石田トレンチの検出了。部長より石田氏の発掘調査過程を復元してはとのお言葉あり。「石田茂作・矢島恭介両氏の発掘トレンチ図」を作成。（日誌裏に「昭和11年調査記念写真」貼付あり）

9.17　東から「暗褐土」の除去を開始。Hラインの南側では、暗褐土の下位でバラス層の広がりを確認。バラス層から奈良時代の土馬が出土。

9.18　08ラインまで暗褐土を除去。黒色土器や灰釉陶器が出土し、10世紀の土層とみる。南半では暗褐色砂礫を除去。10世紀の灰釉陶器皿が出土。

9.19　09ラインまで暗褐土の除去を進める。北半は砂が多く、南半は粘土質になる。

9.21　11ラインまで暗褐土を除去。暗褐土からは羽釜・土師器獣脚出土。

9.22　12ラインまで暗褐土を除去し、「暗灰褐土」を出してゆく。暗褐土下層から瓦器・黒色土器出土。

9.24　12ライン沿いの石田トレンチ（南北方向）を掘り下げ。調査区北端のSD335を掘り下げたところ、溝の直上を敷石（SX370）が覆うことを確認し、両者に時期差があるのはあきらか。

9.25　東西畦の北側で石田トレンチ掘り下げ、南側では暗褐土除去。

9.28　東西畦の北側で石田トレンチ掘り下げ、石を多く埋め込んでいる。南側では12・13ライン付近において、暗灰褐土上面で耕作溝を検出する。

9.29　13ラインの西側で石田トレンチを掘り下げ。埋戻土に石多し。石田トレンチの外側では暗灰褐土上面で遺構検出。

9.30　14ラインの西側で石田トレンチ掘り下げ、石組溝SD330・331を検出。また本日より、西端から暗灰褐土の掘り下げにかかる。

10.1　12ラインまで暗灰褐土の除去。東西畦の南側では粗砂面を出す。暗灰褐土直下の石敷SX370はSD335側石より上位（UJ12区）。Hライン沿いの石田トレンチで石敷SX327を確認。

10.2　SD335の側石天端を出す。東西畦の北では石田が確認した石敷SX327の再検出。南では14ライン以西で暗灰褐土を除去し、石敷を精査。

10.3　東西畦の南では石田トレンチ掘り下げ。北側でも同じ作業。

10.5　東西畦の北では14ライン以西で石田トレンチ掘り下げ。南では石組溝SD330の埋戻土を除去。SD330・331は底石あり、SD333は底が一段高く底石あり、SD334は底石なし。

10.6　SD334・335で埋戻土除去。14ライン以東の石敷を覆う暗灰褐土からは９・10世紀の黒色土器が出土。

10.7　東西畦の北側でSD335を完掘。これより東では10ラインまで、暗灰褐土とその直下の「黄褐土」を除去して石敷SX327を検出。

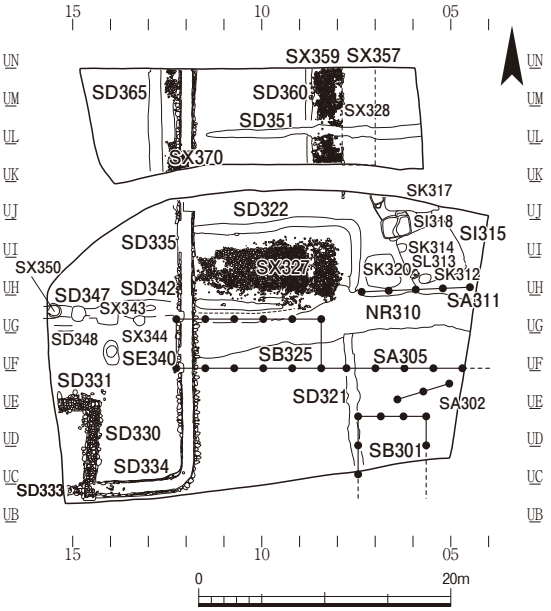

Fig. 9　第１次調査　北区・南区　1：600

10.12　東西畦の北側で黄褐土を除去し、石敷精査（SX327）。南側でも暗灰褐土を除去。

10.13　引き続き暗灰褐土・黄褐土を除去して石敷SX327検出。石敷上面の土層は「バラス層」（10月28日以降の「１礫」）の下に潜り込むことが判明。

10.14　東西畦の北側でSX327検出。南では暗灰褐土を除去して検出した礫面が、黄褐土の下に潜ること[1]を南北畦で確認。礫面は石敷SX327より古く、河川堆積の可能性がある。

10.15　東西畦の北側では、08ラインの西でSX327の東端を確認。UJ08区では石敷直上層から平安時代の黒色土器等出土。南側では暗灰褐土を外して粗砂・礫面を検出。

10.16　06ラインまで遺構検出進めるも、午後は雨天中止。

10.17　UH05区でカマド跡らしきものを確認、５世紀の甑１個体が出土。竪穴建物があるらしい（SI315）。南側では暗灰褐土を除去し、礫面の検出作業を続ける。

10.19　東西畦の北側では暗灰褐土の途中で竪穴建物SI315を検出するも、全形はまだあきらかでない。南側では06ライン付近で砂礫層Ⅰが途切れ、黄褐粘土の上面を削り精査。

10.20　東西畦・南北畦の土層図作成。作業員は水落遺跡に投入（20・21日）。

10.28　Kラインの北側に北区を設定し耕作土を除去（以後、これまでの調査区を南区とする）。南区では東端から、黄褐土上面でSI315の輪郭を検出。同区南半の礫層は「１礫」[2]と称して遺物取り上げ。

10.29　（北区）耕作土を除去し終え、北半で床土の除去にかかる。床土は薄く、その直下は暗灰褐土。東端では耕作溝の検出を開始。

10.30　（北区）床土の除去が完了し、暗灰褐土上面で耕作溝を検出。（南区）SI315の掘り下げ。SB301の柱穴４基を検出。東北大研修旅行一行、伊達宗泰氏、原島礼二氏来跡。

10.31　（南区）UH06区にて土坑SK320を検出、９世紀の土器が出土。07ラインの西側・Fラインの南側では１礫を除去。文化庁中野氏来跡。

11.2　（南区）Gラインの南側で１礫を除去し、南北畦を撤去。畦畔の暗褐土から緑釉陶器が出土。

11.4　（南区）07ライン付近で南北溝SD321を検出。Gライン付近の流路NR310より古い。埋土は細砂で礫を含む。NR310では最上層の暗褐土（粘土）を除去する。UF06区で帯金具片が出土。

11.5　（南区）SD321の続きを検出し、Jラインで西へと折れることを確認（SD322）。Gライン沿いでNR310上層の暗褐粘土を除去したところ、中央に深い東西溝を検出（SD326）。また、08ラインからSD335にかけて１礫を除去し、東西溝SD323・324を検出した。Fラインに小柱穴４基が並ぶ。

11.6　（南区）SD335の西側で１礫を除去し、SD335の側石上面に高さを揃える。UG15区の土坑を掘り下げ、須弥山石の痕跡を発見。剝がれた石がモナカ状に残る（SX350）。土坑は明治35年掘り出し時のものと思われる。

11.7　（南区）SD335の西側において１礫の除去と、石田トレンチ掘り上げ。EF13区の深掘りは石田図面の「井戸」にあたるか。UG15区の須弥山石抜取穴の底を精査し、略図作成。午後、飛鳥資料館の須弥山石と比較し、第１石上端の圧痕と判明。

11.9　（南区）SD335の東側ではFライン沿いでSA305柱掘方を検出。GラインでSD342の延長を検出し掘り下げ。須弥山石の「据付痕跡」は当初のそれにあらず、その周囲に古い抜取穴らしき穴も検出。南北溝SD365と、東西溝SD322を検出。

11.10　（南区）UG13区に「石人像」の痕跡あり、「抜取穴」で遺物取り上げ。SD326の南側で黄褐粘土粒を含む柱穴４基を検出[3]、西端の１基はSD335の西側石を壊している。UE05区では弥生時代の土坑SK304・SK306を検出。

11.11　（南区）SI315を掘り下げ床面精査。SK320

1）この「黄褐土」はSX327の上面を覆っていた土層で、平安時代に降るもの。その下位に潜る「礫面」は、10月19日以降の「砂礫層Ⅰ」や「１礫」の上面を指すか。

2）「１礫」は第１次調査区の南半に分布していた灰色の砂礫層である。日誌では10月28日から11月７日にかけて除去しているが、このときには完除できておらず、まだ残ったままであった。

3）この柱穴４基は、第214次調査ではSA4646として再認識した。

では土馬が、NR310では奈良時代の土器が出土。SA305柱穴検出。

11.12　（南区）SK320掘り下げ。SA311の柱穴およびSB301の柱穴を検出。後者は梁行３間・桁行２間以上となる。15時に記者発表。

11.13　（北区）12-13ラインで石田トレンチを掘り下げ。SD335西側石を検出し、東側石を探る。南区北端と同様に、SD335が石敷に覆われることを確認。（南区）清掃と現地説明会の準備。SI315の火処は作り付けのカマドと判明。SK320断ち割り。

11.14　現地説明会。説明は西口がおこなう。北区では石田トレンチ内でSD335の側石を検出。

11.16　（北区）13ラインの西側で床土より掘り込む「バラス土坑」を検出。石敷SX359と「段石」（SX358）も検出。その東側はバラス多く（SX357）、薄い黄色粘土に覆われている。石敷面で検出した東西溝SD351は南北溝SD360より新しく、SX359を壊している。（南区）石組溝の写真撮影。

11.17　（北区）SD351完掘。石敷SX359の東辺にてSX358と、バラス敷SX357を検出。SD335の未掘部分（Mライン以南）を掘り下げ。埋土は上層の「埋土」と、下層の「粗砂」「柔土（ニコ土）」とに分かれる。飛鳥Ⅰ・Ⅱの土器が少量出土。SD360と「バラス土坑」掘り下げ。

11.18　（北区）UM06区の斜行溝SD355を完掘、方形周溝墓の周溝か。Mライン以北では砂混じり粘土上面で遺構検出をおこない、石敷SX370を除去しSD335を完掘。文化庁牛川氏・河原氏ら、水落遺跡整備の件で来跡。

11.19　08ラインから西側へ清掃。空撮用の標定点を設定し、全景写真撮影。

11.20　空撮。11時20分に飛来し12時に終了。午後、SD335を南から撮影。

11.21　遣り方設定。

11.24　遣り方の杭打ち。貫板も打ち始める（北区はH=101.80m・南区はH=102.10m）。

11.25　遣り方の基準線振り込み作業。

11.26　遣り方設定、北区も完了。

11.27　雨天中止。

11.28　北区から実測開始。

11.30　平面実測作業。

12.1　北区にて平面実測作業（未完）。

12.2　（北区）平面実測とレベル記入。SD335の西側で掘り下げ。平安時代の土器を含む暗灰褐土を剝がしてバラスを検出する。（南区）平面実測。

12.3　（北区）平面実測。13ラインの南北溝SD365をバラス面で検出。埋土には炭・鉱滓・鞴羽口と、７世紀代の土器を含む。（南区）平面実測、東半は石敷をのぞき完了。

12.4　（北区）黄灰褐土を除去し柱穴を探す。その下位に小バラスの面（SX430）を確認。（南区）レベル記入、石敷をのぞき了。八木充氏来跡。

12.5　（北区）SD365掘り下げ、埋土から鉱滓・土器出土。08-12ライン間ではバラス面SX430を出す。（南区）流路NR310埋土を完全に除去、奈良時代中頃の土器出土[4)]。

12.7　（北区）茶灰褐色粘土の柱穴多く検出すれど建物にはならず。SD365は完掘。（南区）NR310埋土を除去し、東西塀SA311柱穴・土坑SK306を検出。SK304など弥生時代の土坑を完掘。

12.8　（北区）バラス敷SX357を除去。（南区）SK320では炭入り粘土より飾金具出土。NR310の砂礫層を除去し、SA311が西へと延びてゆく。

12.9　（北区）UL08区・UM07区でSX357・SX358断ち割り。（南区）SI315内の貯蔵穴を完掘し、製塩土器が出土。SA305・SB325柱穴を断ち割り。弥生時代の土坑SK308完掘。

12.10　（北区）SX357断割平面図、SD335断面図等作成。（南区）12ライン西側で遺構検出。NR310埋土を除去し、道祖神像（石人像）の「当たり」と見えた石の痕跡を検出。

12.11　（北区）遣り方を外し、中央および西側の埋め戻し。（南区）西壁・北壁土層図の作成。SD330・SD335の掘方探しと、SD330北端にて断ち割り。

12.12　（南区）昨日までに断ち割った遺構の平面図・断面図作成。実測作業ほぼ完了。

12.14　（南区）石組溝掘方の実測と、SB325柱穴の断面図作成。

12.15　（南区）引き続き、石組溝掘方の実測。北壁土層図のほかはほぼ完了。

12.16　（南区）水落遺跡、急を告ぐ。よって北壁土層図の作成を後回しにして水落遺跡へ。作業員は埋め戻し急ぐ（埋め戻しは12.25まで）。

12.24　（南区）秋山氏らによる「須弥山石」痕跡の型取り。

12.25　（南区）「須弥山石」痕跡の型取り完了。型の取り上げ後に下層を調査し、東西溝が続くことを確認（SD347）。北壁土層図を描き始める。

12.26　（南区）北壁土層図、描き直しのうえ完了。これにて調査終了。以後、埋め戻し。

1.29　埋め戻し完了。

1.30　機材撤去完了。

4）第１次調査ではNR310（調査時にはSD310）埋土を完除したというが、これは誤り。第214次（令和５年度）では、その掘り残しを「灰色砂礫」として掘り下げたところ、やはり奈良時代の土器が出土している（本書Fig.60）。

B　第２次調査　1982年４月21日～1982年10月23日

4.21　９時より調査開始のあいさつ。来賓として村教育長・村会議長ら参列。部長挨拶・調査員紹介。10時より作業開始、東からコンベア並べる。

4.22～25　耕作土除去。この間に地区杭打ちと現水田面のレベル測定。

4.26　西側から床土除去を開始。13ライン付近に中世のバラス群が見え始める。

4.27　12ラインでSD335を確認した石田トレンチを検出。

4.28　床土除去が10ラインまで進む。12ラインの石田トレンチは半スコ掘り下げておく。

4.30　床土除去は08ラインまで。

5.4　床土除去が04ライン付近まで進む。NHKヘリ空撮。

5.6　床土除去が完了。東端から遺構検出にかかる。中世から現代までの耕作溝多し。

5.7　昨夜の雨で大洪水。排水と耕作溝の検出。

5.8　06ラインまで耕作溝を検出。

5.11　10ラインまで耕作溝を検出。西南部の中世石溜で清掃開始。

5.12　耕作溝の検出、12ラインまで。

5.13　中世石溜の清掃了、写真撮影。

5.14　雨天中止。

5.15　石田トレンチ、SD335側石の上面が出る深さまで掘り下げ。

5.17　検出作業、調査区北半は西端まで到達。南半では中世バラス溜を断ち割り。

5.18　中世バラス土坑でバラスを除去。NHK撮影＆新聞記者来跡。

5.19　東端より遺構検出を開始。UL05区で弥生時代（第Ⅰ様式）の土坑SK383を検出。

5.20　SK383にて撮影・遺物取り上げ。SD351を検出。

5.21　埋土にバラスを含む土坑SK409・SK412や井戸SE410、羽釜片を含む溝SD397等を検出し掘り下げ。

5.22　遺構検出は07ラインの手前まで進む。

5.24　遺構検出は08ラインまで。調査区東北隅付近にて石組溝を検出（SD435）、SD335が東折したものか。ほかにSK453やSD391（古墳時代）を検出し掘り下げ。

5.25　09ラインまで遺構検出。08ラインの西側では一段掘り下げて石敷SX359を検出し、東に戻って段差・見切石（SX358）を探す。

5.26　昨日に続き07・08ラインで遺構検出。東西畦の北側では中世の攪乱が広範囲におよぶが、南側では７世紀後半の石敷SX359がきれいに出る。

5.27　遺構検出は10ラインまで進む。SX359は西へ曲がっている模様（SX401）。石敷で囲われた部分が建物となるか。石組溝SD435は砂層上面まで掘り下げ、上部は「バラス」、下部は「埋土」で取り上げ。小野山節先生・井川史子氏来跡。

5.28　遺構検出は11ラインまで進む。UQ09区にて石敷SX401を検出。東海テレビ撮影あり。

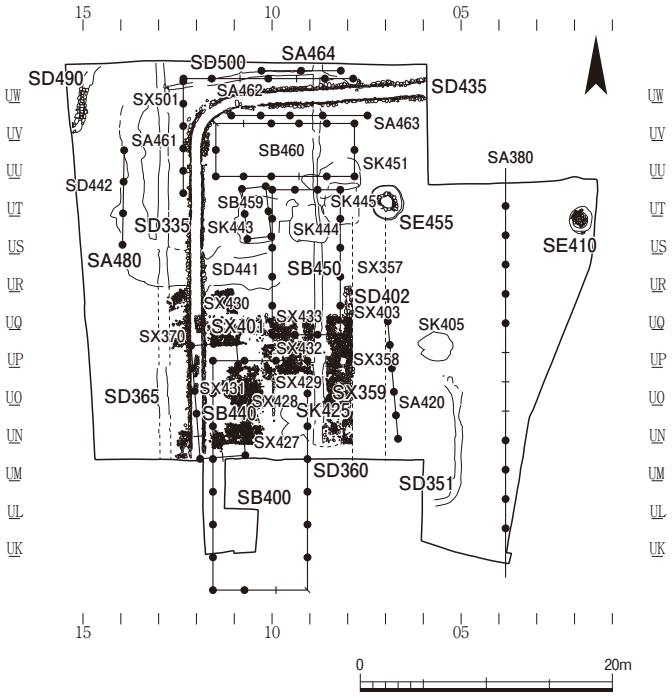

Fig. 10　第２次調査　1：600

5.29　09-11ライン間で遺構検出。UW10区にてSD435の続きを検出。

5.31　09-12ライン間で遺構検出。UW11区にてSD435が南に折れる。SD335は、東西畦の南側では上層石敷SX370に覆われるため完掘できず。王仲珠氏ご一行来跡。

6.1　昨夜の大雨のため、午前中は作業不能。ポンプ５台で排水。T-Uライン付近でSD335の東側石を検出。

6.2　SD335・435の検出と掘り下げ。溝内堆積土を順次除去。Vラインの断面観察より、上位からバラス・埋土・砂層１・ニコ土１・砂層２・ニコ土２の順で遺物取り上げ。

6.3　雨後のため遺構検出はせず、西端の中世包含層を除去。南北畦の土層図作成。

6.4　南北畦の南半を除去。上層石敷撮影のため南半を清掃。SD335の西側で中世の溝などを検出。14時に石敷を撮影。

6.5　Sラインの南側・14ラインの西側でバラス集積を検出。床土直下で見えていたもの。

6.7　石組溝上面の石敷実測了。東西畦の土層図作成にかかる。Sラインの北側（13ライン沿い）では、砂質バラス上面で南北溝SD365を検出。

6.8　東西畦西半の土層図は測了。石組溝の撮影と実測作業。本日、水落遺跡の記者発表。

6.9　調査区西北部にて石組溝SD490を検出。７世紀代で底石あり。

6.10　田植えのため作業員激減。遺構検出は西端から東へ進み、SD335は完掘。埋土から瑪瑙製垂飾が出土。Wライン付近で南北溝SD365の断面観察。整地土（バラス混粗砂・黄褐土混じりの灰褐粘質土[5]）から掘り込み、埋土はニコ土。

6.11　南北畦の撤去開始。天武朝石敷下のバラスもある程度目地が通り、計画的なバラス敷（SX430を指すか）とみられる。UW12区で東西溝SD500を検出。

6.12　ガソリンエンジン不調のため作業はかどらず。SD335・435の曲折部付近で複数のピットを検出。南北畦の撤去続ける。

6.14　SD500にて７世紀の土器多数出土。

6.15　US・UT08区付近に大土坑SK445あり、落ち込んだ石は撮影後に撤去。SD500は08ライン以東で不明瞭。

6.16　（この日、07ラインの東側で遺構検出）

6.17　記者発表。空撮用の標定点設置。調査区東南部のバラス土坑からは瓦器片などが出土。

6.18　UP05区の「祭祀土坑」SK405にて、６世紀前半までの土師器高杯が多数出土。礫とともに投入した状況を見せる。UQ04・05区の「竪穴住居」（SK404）ははっきりせず。

6.19　14時に指導委員来跡。15時から現地説明会。

6.21　UQ05区の土坑SK404で５世紀後半の須恵器出土。空撮に向けて石組溝・石敷等の清掃。

6.22　全景写真撮影。

6.23　弥生時代・古墳時代土坑SK404・405等の精査。空撮用基準杭の設置。

6.24　13時に空撮。その後遣り方設定。水糸高はH=101.600m。

6.25　水糸を配り、実測作業開始。

6.26・28　実測作業。

6.29　調査区東部の実測作業終了。昼からSK405・SK406およびSD385を掘り下げ。

6.30　実測作業終了。SK405・SD385の断面図作成と写真撮影。

7.1　調査区東南部でバラス土坑掘り下げ。弥生時代の土坑SK404・405・406で写真撮影。

7.5　UT01区の土坑掘り下げ。井戸の可能性があるので全体を掘り下げることにした。

7.6　UT01区の土坑は、深さ1.5mで石組を確認し井戸と判明（SE410）。深さ2.2mで曲物を確認。出土土器から13・14世紀の井戸か。

7.8　平面実測続く。SE410の実測と写真撮影。

7.9　SE410を完掘し、補足実測。壁面で弥生時代の土坑SK408を確認。

7.10　SK408を完掘し土器取り上げ。

7.12　UT07・08区にてバラス入の円形土坑を確認。井戸か（SE455）。

7.13　SE455で石組を確認。

7.14　SE455の掘り下げ続く。大石の除去にチェーンブロックを使用。

7.15　SE455完掘。底には礫層があるだけで曲物なし。東半分の埋め戻しほぼ完了。

7.16　SE455にて写真撮影。午後は雨天中止。

7.17　終日、排水作業。

7.20　SE455の北側で精査。全体に中世の土層が残り、これを除去して遺構検出。RラインでSD335断ち割り。SD335の西側では、砂層の整地土が上層石敷の下にあり、その下面でSD335の掘形が見える。断割の南側で黒灰色粘土の土坑SK486を検出。

7.21　UV08・09区で柱穴を検出。UV10区のSD435掘形を壊す柱穴と並ぶものと思われる（SA464）。UU08区で土坑検出。UU07区で確認のため断ち割り。

7.22　UU07区で土坑SK454検出。遺物多く６世紀後半か。

5）この整地土は７月20日以降の日誌に散見される「砂層の整地土」、あるいは「黄灰色土」と同一の土層を指している。

7.23　Vラインの南側で09ラインの西側に大きな「よごれ」あり。その下位で柱穴状の穴２基を検出。
7.26　UT08・09区で東西３間×南北２間以上の建物柱穴を検出（SB450）。北側柱の東から２基目はSD335・435にともなう可能性がある。柱穴埋土は黄灰褐色粘土で、下層の建物か。
7.27　SK454にて６世紀の土器出土。Sラインの南側では南北溝SD360掘り下げ。UP08区付近で検出した柱穴２基はSB450の南側柱列となり、上層石敷SX401の下層にあると確定。
7.28　下層建物SB450の検出続く。UO10区付近の黄灰色砂質土は整地土か。10ラインの西では、平安時代の建物SB440を再検出。
7.29　SB450の検出を南へと進める。Qラインの北で整地土を除去して下層石敷を追求。その上には黄灰色土（整地土）を介して上層石敷が載る部分がある。
7.30　石敷SX401の南側で礫がない部分に大柱穴４基あり（SB400）。これらは「砂の整地土」の上面で検出でき、SD335の掘形方を壊している。SK425を完掘し、東側の柱穴を探すことにする。
7.31　UN08・09区にてSK425を掘り下げ。UQ11区の黒灰色土坑は北半を掘り下げ。午後から台風10号接近し、翌日にかけて大雨。
8.1〜8.4　大雨で調査区冠水。甘樫橋の北で飛鳥川が氾濫し、道路流失。雷橋も流失。8.2に排水するも再び大雨、8.3は終日排水（大雨洪水警報）。8.4も終日排水。
8.5　雨後の全体清掃。SK425を再検出し、その底で柱穴を探す。下層石敷の土層観察畦は、もはや作図できないくらい傷んでいるので撤去する。
8.6　SB450の南側柱列を確認し、３×５間と判明。SB400は昨年の調査区まで延びる模様。
8.7　11時に記者発表（木下・西口）。現地説明会以後の新知見について。SB450・SB400および下層石敷SX430の写真撮影。SB400を確認するため、昨年度の調査区を再発掘することとし、11ラインの西側で耕作土を除去。
8.9　第１次調査地の再発掘区（南拡張区）では床土除去終わり、遺構検出にかかる。11ラインでSB400の大柱穴３基を検出。粘土の柱穴は柱抜取穴と判明。
8.10　南拡張区を水路際まで拡張し、SB400西側柱の６間目を検出。妻柱もその一部を確認。
8.11　SD335の西側でSA480柱穴の断割調査。南北溝SD365を断面で検出したが遺物ほとんどなし。UN12区では、整地土（砂）がSD335の側石まで続くことを確認した（日誌裏にSD335・SD365・整地土等の層位関係模式図あり）。
8.12　SB400・SB450の柱穴断ち割りと実測作業。
8.13　SB450の写真撮影と実測作業。
8.17　SB450の南側柱列を確かめるため、SD360を掘り下げ。柱穴はありそうだが、ほかの２基はよくわからない。
8.18　柱穴の実測完了。石敷の断面図は未完。石敷を除去し、砂を撒き始める。
8.19　排水作業。ただし午後、再び降雨。
8.20　雨中、SB450の柱穴断面図を作成。
8.21　柱穴の断面図・土層図完成。黒灰色土坑（SK425）を掘り下げたが、石敷SX359を壊していることを確認。本日をもって調査終了。
8.31　SK425に残っていた土師器甕を取り上げ。
9.13　台風18号の雨のため、その排水と草刈りを実施。ただし泥濘のため作業中止。
9.20　耕作土入れのためコンベアを設置。
9.21　午後から排水と草刈り。
9.30　埋め戻し終了。
10.23　飛鳥寺北トレンチの耕作土入れ終わり。（終了日はこの日と赤鉛筆で記入あり）

C　第３次調査　1983年７月18日〜1984年２月20日

7.18　明日香村課長・飛鳥総代に挨拶。東から表土掘削開始。フェンス張り。
7.19　表土掘削とフェンス張り。
7.20　水田畦畔の東側は表土掘削が完了。石田トレンチを床土上面で検出し、埋戻土を除去。石組溝SD331底石上に残る堆積層も掘り下げ。
7.21　耕作土の除去。調査区中央の水田畦畔は撤去し、埋め戻し後に復旧することに。
7.22　耕作土の除去は４分の３が完了。
7.23　雨天中止。
7.25　耕作土の除去完了。本日より学生３名参加。
7.26　西端から床土の除去を開始（27ラインまで）。Gラインに東西畦を、23ラインに南北畦を設定。遺物の取り上げは東西畦を境に「北半床土」・「南半床土」とする。
7.27　床土の除去は25ラインまで進む。九州大・横山浩一先生来跡。
7.28　床土の除去は21ラインまで。E-Gラインで玉石多く顔を出す。
7.29　床土除去は18ラインまで進む。Hライン沿いに礫混じり土があり、東西に延びている。
7.30　床土除去は16ラインまで。
8.1　床土除去完了。東端から遺構検出を開始し、マンガン混じり褐色土の上面で耕作溝多数を検出（17ラインまで）。UF16区で石田トレンチ掘り下げ。Gラインの北側でも石組溝の側石らしきものを確認、調査区の北へと延びている模様。
8.2　床土の残りを除去しつつ21ラインまで遺構

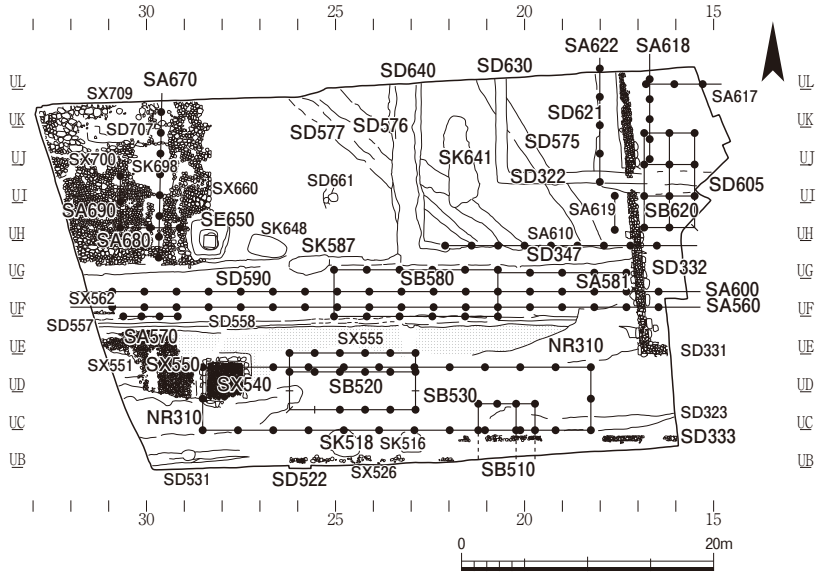

Fig. 11　第３次調査　1：600

検出。

8.3　遺構検出を23ラインまで進める。床土直下の土層は、Hラインの北側では「茶褐色フ入り土」だが、南側では「黄褐砂質土」となる。Hライン沿いにバラス多く、旧地境とみられる。

8.4　25ラインまで遺構検出。E-Gラインに拳大から人頭大の玉石が散乱している。

8.5　26ラインまで耕作溝を検出。人頭大の玉石が茶褐土に据わっている。この茶褐土は土器片を相当量含んでいる。

8.8　27ラインまで耕作溝の検出進む。

8.9　29ラインまで耕作溝の検出進む。Eラインの北（UE27・28付近）に東西石列状の玉石あり。

8.10　31ラインまで耕作溝の検出。UE30区付近に石敷らしきものあり。

8.11　褐色土上面での遺構検出終了。西端から褐色土の除去開始。調査区西北部では褐色土の下にバラスおよび焼土あり。UJ32区に２条の東西石列があり、その上を焼土が覆うものと思われる。

8.12　Gライン以北では褐色土下のマンガン層を除去。Gラインの南側では、29ラインまで褐色土の除去を進め、マンガン層の上面で止める。マンガン層・暗灰砂質土ともに石敷を覆っている。調査区南端に流路NR310あり。

8.17　台風のため作業中止。

8.18　Gラインの北側で褐色土を除去し、暗灰土上面で耕作溝を掘り下げ。Hラインの玉石散乱部にくぼみあり、その北側に焼土、南側に暗灰土あり。焼土より北側は土器を多量に含む。

8.19　27ラインまで褐色土の除去。Gライン沿いに東西溝状の落ち込みあり、中に玉石が散乱。「藤原宮期」[6]の土器多量に出土。Eラインの南側ではNR310の北肩にて石敷の一部を確認。灰色粗砂に覆われており、その上をバラスが覆う。

8.20　26ライン付近で褐色土除去。Gラインの南側では、東西溝状の落ち込みで黄色粘質土を確認。

8.21　25ラインまで褐色土除去。東へ進むにつれ褐色土が薄くなり、出土遺物も「藤原宮期」よりも古いものが目立つ。Fライン沿いで黄色粘質土の面が見えている。NR310は全体に浅いが、部分的に深い。

8.24　22ラインまで褐色土を除去。東西畦の北側の東西溝２条を、それぞれ大溝１・大溝２と称し掘り下げ。NR310からは平安時代の土師器皿が出土。

8.25　20ラインまで褐色土の除去。F-Gライン間では、バラス面の上面で小ピットが東西に並んでいるのを確認。

8.26　18ラインまで褐色土を除去。大溝１・２を検出。バラス面は18ライン付近で途切れている。NR310掘り下げ。坪井所長・狩野部長見学。

8.27　17ラインまで褐色土を除去し、大溝１・２の検出を進める。UJ19区の大石付近に南北方向の落ち込みあり。NR310掘り下げ。

8.29　16ラインまで褐色土の除去。UG17区では大溝１・２を覆う粗砂混のバラス溝があり、UH17区ではSD332の側石を覆う。石田トレンチ付近では、粗砂混バラスが石組溝を覆っている。

8.30　褐色土の除去、東端まで到達。東西畦の北側では礫敷を出す。南側では灰色粗砂を除去し、

6）第３・４次調査の日誌では、おもにC期の土坑から出土する飛鳥Ⅳの土器を「藤原宮期」のものと記している。この日誌抄では原文のままとする。

一部で整地土を出す。

8.31　東西畦の北側では石組溝SD332の掘方を検出。その埋土は底石直上から粗砂・砂礫・粘土の順に堆積している。南側ではSD332掘り下げ。

9.1　Gラインの北側でSD332掘り下げ。底石上に粗砂と砂礫層が堆積している。UI・UJ16区に黄褐粘土が入った柱穴あり（SB620の一部か）。UB17区付近でSD333を検出。

9.2　Gライン以北でSD332完掘。側石の大半は失われており、底石上に砂層が残るのみ。本日、NHK奈良局の撮影あり。

9.3　北半では18-19ライン間で褐色土を除去。Jライン付近で東西溝SD322検出。G-H間でも東西溝が重複している。東西畦の南側では黄色粘土混バラス層上面で小穴を検出（SA600柱穴か）。

9.5　UJ18区より北側では黄色粘質土の広がりを検出。その上にはバラス混じりの灰褐土が載る。UF18区付近で出土した凝灰岩は比較的大きく、黄色粘質土に覆われている。

9.6　21ライン沿いで検出した南北溝SD630は、Jライン沿いの東西溝SD322につながる見込。調査区の南半ではSD310を掘り下げ。科学万博担当官が来跡。

9.7　SD322が北折してSD630となることを確認。南半では黄色粘質土の検出を継続。UD19・20区では黄色粘質土が入った柱穴掘方２基を検出（SB530）したが、NR310で削られており、底がわずかに残るのみ。

9.8　UI・UJ21区付近でSK641を検出。遺物は「藤原宮期」。G-H間では、大溝１・２より古い溝があることが判明（SD590）。南半ではNR310掘り下げ。SD333は底石がかろうじて残るものの、目地にも自然流路の砂が詰まっている。

9.9　SK641完掘。古溝（SD590）の埋土は青灰砂。南半ではSD310の粗砂を掘り下げ。

9.10　23ラインの南北畦に沿い、SD640の東肩を検出。これとSK641との間には古い斜行溝がある（SD576）。Gラインの北側では、灰褐土・暗灰褐土の下に黄色粘土混バラス層がある。

9.12　北半ではUH22区で暗灰褐土を除去。南北畦の西側で灰褐土を除去し、南北溝を検出（SD640）。南半では23ラインの西側でNR310掘り下げ。UD29区では暗褐土を除去し、石敷SX550の広がりを確認。

9.13　北半では灰褐土を除去してSD640の西半分を掘り下げ。東半は検出のみで未掘。埋土からは「藤原宮期」の土器多数出土。

9.14　北半にて灰褐土と、その直下の炭化物混じり層を除去し、黄味がかった砂質土の面を追いかける。Hラインのやや南で、南側への落ち込みがあり（SD347の北肩か？）。SX550写真撮影。UF23区付近では黄色粘土の面を出してゆく。

9.16　UG25区にSD590より新しい土坑があり、それは大溝１・２に壊されている。SD590の北側には黄色粘質土があり、その上にバラス層が載る。南半では石組遺構SX540を精査し掘り下げ開始。その掘方はSX550を壊している。

9.17　北半では灰褐土の除去。南半ではSX540内精査。粗砂を除去すると、瓦片を多く含む土層あり。

9.19　北半では灰褐土の除去。SX540は内法3.2×3.0mで、西北隅ではNR310が側石の底まで抉っている。東西溝SD348掘り下げ。

9.20　UT27区付近にバラス面あり、遺物多し（「バラス混灰褐土」で取り上げ）。25-27ライン間でNR310北肩を検出。

9.21　北半では26ラインの西側で灰褐土の除去。UH27区の西半にて玉石の密集を確認。

9.22　北半ではUH27区にて石敷遺構の一部を検出。NR310掘り下げ、SX540では褐色土を掘り下げたところ、西南部で玉石が詰めてあるのを確認。７世紀中頃の杯出土。

9.24　NR310の粗砂を除去、褐色土下は上位から暗褐砂土・灰褐砂・粗砂。SX540では西南隅で灰褐粘土を掘り下げ、石敷面を確認。

9.26　NR310周辺にて精査をおこなうも、午後は雨天中止。

9.27　台風接近のため早めに中止。鈴木文化庁長官来跡。

9.28　台風のため作業中止。

9.29　調査区西端で検出した東西石列SX562は黄褐粘土（整地土）の敷設以前の遺構。この整地土の上位には小砂利層があり、さらに「藤原宮期」の遺物を含む灰褐土で覆われている。

9.30　東西畦の北側で石敷を確認（SX700を指すか）し、雨天決行の成果あり。東西畦下の東西溝SD590では奈良末～平安初の遺物出土。

10.1　北半では黄色整地層まで灰褐土を掘り下げ。SD590の北側で31ライン以西では、整地層を除去して石敷面SX700を検出する。石敷上をバラス層が覆い、その上に灰褐土。UJ32区では灰褐土の下、整地層よりやや上位で須恵器蓋４点が出土（７世紀中・後半）。

10.3　北半では黄色整地土上面で遺構検出。Hライン付近では石敷面を検出、上位の灰褐土からは「藤原宮期」の土器出土。東西溝SD590はバラス面から掘り込んでおり、東西溝SD348からは奈良時代末から平安時代の土器が出土。

10.4　北半では石敷SX700の検出。Iラインの北側・31ラインの西側では、石敷を灰褐土が直接覆っている。これ以外の範囲では石敷上にバラス層が載り、その上を灰褐土が覆うところが多い。

10.5　UG29区およびUJ29区・UK29区の土坑から「藤原宮期」の遺物出土。Fラインでは西端の東西石列の南で石敷を検出。この石敷を壊す東西溝は黄色整地土で覆われている。

10.6　28ラインで石敷SX700が途切れ、その東端が揃うことを確認。北端では28-29間で黄色整地土を除去して石敷面を検出。

10.7　UH-UJ30区で柱穴３基を検出（SA670の一部）。Gライン沿いでは大土坑が東西に並んでいる。出土遺物は「藤原宮期」。

10.8　26ライン付近に南北柱穴列２間分あり（SA682か）。掘方埋土は炭化物混じり土。Eライン付近では東西に並ぶ柱穴３基を確認（SB520）。UG26区でSK587検出。

10.11　バラス層上面から掘り込む柱穴あり。UG24区の土坑SK585からは「飛鳥Ⅲ」の土器が出土。

10.12　流路NR310に重複する掘立柱建物SB520を検出。柱痕跡に黄色粘土が混じる。７世紀後半代の建物と理解しておく。

10.13　北半では南北溝SD640が、Gライン沿いの東西溝SD347につながることが判明。溝幅が広く、埋土も同じ。南半ではDライン付近で柱穴４間分（SB530）と、Fラインの北側で東西方向の柵列11間分とを検出（SA560）。

10.14　調査区北東部では黒褐色粘質砂の上面で遺構検出、SB630柱穴は埋土に黄色土を含む。UK15区には１ｍ四方に石敷SX611（のちSD730底石）が残る。SA600柱穴は、19-20ライン間の２基がSD332で壊されているため、柱掘方が立柱後の積土に覆われる状況が確認できる。

10.15　現地説明会にむけての清掃。泉森氏・千田氏来跡。

10.16　現地説明会。

10.17　北半ではSD332の東側で遺構検出。Kライン北側で東西石列SX612あり、北側が一段高く、SD332側石天端に揃っていたものか。

10.18　東北部でSD605・630を検出。西北部では灰褐土を除去したところ、黄色整地土は残らず、焼土面で遺構検出。その下にバラス層あり、石敷はさらにその下位にあるか。

10.19　北半では東端から21ラインまで精査。南半では基壇上面を精査し、北寄りで東西に並ぶ柱掘方３基を検出。土坑SK641を検出、遺物は天武朝頃。西北隅では黄色土上面で遺構検出。

10.20　Fライン沿い（19・20区）にてSA600の柱掘方を２基検出。その南側の東西溝SD558は礫敷SX555を壊している。SD576・577を検出。SX555の下位に黄色整地土を確認。

10.21　23ラインの南北畦を撤去。西北部では整地土を除去し、バラス敷と石敷SX700との関係を見極める。SX700は北西に向かって傾斜し、上面には黄味を帯びた粘土が貼り付いている。目地からは水落遺跡と同時期の土器片が出土[7]。午後、西半の写真撮影。

10.22　前日の写真撮り直し。北半では南北畦の撤去。UC20区にSD333側石抜取穴と重複する柱穴あり。Gライン沿いでは20・21区にSD347と重複する柱穴が２基ある（SA581）。

10.24　23ラインで南北畦を撤去し、SD640を完掘。「藤原宮期」の遺物出土。20-23間では、F-G間で柱掘方２列を掘り下げ（SA581・600）。Dラインの南側でも柱掘方を検出（SB510）。

10.25　UE・UF23区にて南北方向の浅い溝があり、これを掘り上げ。整地黄色粘土に覆われた柱穴を検出した。UB20-22区にかけて木樋の痕跡とみられる粘土が東西に延びているのを確認。

10.26　北半ではバラス層除去。その直下の黄色整地土に貼り付いている。Ｆライン沿いの基壇上面では、昨日検出した柱穴を壊す柱掘方が南側にあると判明。南半ではSB520柱穴を新たに検出。SB510は南北棟で東庇か。

10.27　北半ではバラス層を除去し黄色土の面を出す。SB520柱穴はE-Fライン間で礫面を壊して掘り込んでいる。またその内側に別の建物がある模様。基壇上で見つけた４列の東西柱列のうち、一番南のものは柱痕跡に瓦が落ち込んでいる。

10.28　SB580の柱痕跡は基壇南側石の下位にあり、基壇土の上面では見えない。SB520の柱穴が礫面SX555を壊している。

10.29　北半では炭混じりの小穴多い。南端で検出した土坑SK518は「藤原宮期」の遺物を含む。

10.31　27ライン以西では石敷上面で精査。SX540は上層バラス（バラス面の一層上）から掘り込んでいる。

11.1　空撮に向けて全面清掃。標定点の測距と標高測定。

11.2　11時15分から空撮。午後は地上写真の撮影。

11.3　午前中は地上写真の撮影、午後は遣り方設定。

11.5　遣り方設定と水糸配り。

11.7　水糸配り。

11.8　実測作業開始。

11.16　実測作業終了（作業は８日間）。

11.17　実測作業を継続しつつ、東北部より断ち割り開始。SD332では上層底石の一部を外し、下層底石との間の砂層から土器が出土。

11.18　実測作業を継続。SB630の柱抜取穴には

7）同日付の「石敷目地」出土土器は須恵器杯G身の底部小片と、杯G蓋片とを含む。

黄色粘土が詰まる。ほかにSA618・SA622の柱穴を２基ずつ検出。SA600の柱穴は掘方が大きいが、基壇土の途中からでなければ見えない。柱穴を覆う基壇土は版築状の互層をなす。南側石の抜取痕とみられる東西の小溝を検出。

11.19　実測作業と断ち割り。SB630ほぼまとまる。

11.21　SB630の西南隅柱穴で掘方精査、SD332より古い可能性大。土坑SK626掘り上げ。

11.22　実測作業と断ち割り。SA622は４間分まで確認。SA600基壇上面では、23ラインの東側で版築層を除去し、砂質土上面で柱掘方を検出。これらは斜行溝SD576・577より新しい。

11.24　SB630の西側柱筋に揃えた、これより新しい柱列を検出（SA618か）。Hラインの南側で東西柱列７間分を検出。南北柱列SA622とは一連か。SA600基壇上では、SA600よりSA560のほうが新しいと判断する。斜行溝SD575を新たに検出。

11.25　調査区西北部で黄色整地層を除去。SA600基壇東半では掘方と柱痕跡の掘り下げ。

11.26　調査区西北部で黄色整地層を除去。同層は７世紀前半の遺物を含む[8]。SK587で「藤原宮期」の土器多く出土。南半では東西に長い建物SB530の柱穴検出を続ける。

11.28　東北部で平面実測。西北部では黄色整地土の除去と、SK587・SK688およびUG28区の大土坑（のちSE650）を掘り下げ。南半ではSB530の検出を継続。

11.29　SB630柱掘方はSD332側石の据付掘方に、SB530の柱掘方はSD333側石の据付掘方に壊されている。またSB530の柱穴はUB24区の土坑（SK518を指すか）に壊されている。

11.30　SB630柱穴断面図の作成とSD332写真撮影。UG28区の大土坑は井戸と判明（SE650）。「藤原宮期」の土器片多量に出土。UI29区の大土坑SK698を完掘し、黄色粘土の柱痕跡・掘方を検出（SA670）。SB630の柱抜取穴はSD332側石の据付掘方より新しい。

12.1　SE650抜取穴掘り下げ。地表下２ｍで井戸枠の横板材を確認し写真撮影。南北柱列SA670はGラインの北へと延びていることを確認。その柱穴埋土は黄色粘質土。

12.2　調査区西半部でSA600の柱穴を検出。またSA670柱穴が南へと延び、石敷SX700を壊していることを確認。SA600とSD332との交差点にて、前者の柱掘方を検出。SB520は東西11間と確定。SE650埋土掘り上げ。井戸枠を２段まで確認し、再度写真撮影。

12.3　SE650の実測終了。井戸底の砂層はまだ遺物を多く含んでいる。西北部の平面実測も終了。

12.5　西北部では土層図の作成開始。西南部では29ライン沿いでSA600基壇断ち割り。SB530の西妻柱掘形はSX540の西南隅で壊されている。

12.6　西北部で土層図作成、東南部では平面実測。西南部ではSB530西妻柱の検出が難航。SA600掘方は明瞭だが、SA560の掘方見えず再精査。

12.7　地上写真撮影。文化庁次長来跡。

12.8　北半中央部で埋め戻し。東半で土層図作成。西半ではSA670柱穴断ち割り。

12.9　SB530写真撮影と、SA600・SA560断ち割り。

12.10　埋め戻し継続。SA600基壇上の柱列を東半にて断ち割り。北側の２列より新しい東西柱列あり、これよりも新しい東西溝もあり、当初基壇の側石掘方か。

12.12　SA600基壇上で精査。西端に向かうにつれ基壇土が厚くなり、SA600柱掘方の上を黄色土が覆い、その上からSA560柱穴を掘る。さらに桁行５間の建物SB580と、そこから東へ延びるSA581とが重複しているとみる。

12.13　SA600柱掘方（東から２基目）を断ち割り。SD332の側石据付掘方が柱掘方を壊している。調査区西端でSA570柱穴を検出。14時に記者発表。

12.14　SA600柱掘方（東から２基目）の断ち割りと実測。西北部の石敷SX700の断面図作成。

12.15　SB630が東へ延びるかどうかを確認するため、辻本氏水田の畦の一部を掘り下げ開始。西壁土層図作成し、石敷面は埋め戻しにかかる。文化庁河原氏来跡。

12.16　辻本氏の畦は表土・床土の除去終わる。

12.17　辻本氏の畦掘り下げ。

12.19　辻本氏の畦掘り下げ続く。

12.20　辻本氏の畦ではSB630柱穴を検出。坪井所長来跡。

12.21　南壁土層図の作成。辻本氏水田の畦復旧。SA600基壇の断面精査で、石敷と側石との関係が判明。側石には２時期分があり、石敷は古い側石の据え付け後に敷いている。新しい側石を据えたときに、石敷は埋没していたと思われる。

12.22　土層図完成。UB26区で南北石組溝SD522を検出。その南側を拡張したが、瓦混じりの土坑で壊されている。

12.23　SD522は南端の石敷SX526と同時期で、７世紀中葉のもの。15時から年末の片付け。

1.9　記念写真撮影。埋め戻し開始。

2.6　畦作り・床土入れ終了。

2.7　耕作土を東から入れ始める。

2.20　埋め戻し完了。

8）この日「７世紀前半代の遺物」が出土したのは、同日の取上ラベルによれば「UG27黄色整地」だが、出土土器は土師器・須恵器小片のみで、「７世紀前半」のものかはわからない。

D　第４次調査　1984年７月９日～1985年５月７日

7.9　調査開始。周辺整備とコンベア設置。

7.10　西から耕作土の除去開始。

7.16　耕作土の除去完了（所要６日間）。

7.17　東から床土の除去（18ラインまで）。南端では床土直下にバラス層あり。

7.18　20ラインまで床土の除去。

7.19　23ラインまで床土の除去。

7.20　26ラインまで床土の除去。

7.21　27ラインまで床土の除去。

7.23　29ラインまで床土の除去。

7.24　32ラインまで床土の除去。

7.25　床土の除去終了。

7.26　西から二番床を除去して遺構検出。褐色土までの間に灰褐粘質土が10cmほどある。

7.26　東西畦の北は29ラインまで、南は30ラインまで遺構検出。Pラインの北側には淡灰粘質土あり、北半ではその上面で遺構検出。

7.28　28-30間で耕作溝検出。

7.30　26-29間で耕作溝検出。

7.31　本日より東の水田（26ラインの東）へ。東西畦の北側は二番床が厚く１スコだが、南側は半スコ（25ラインまで）。Pライン北側の淡灰粘質土は瓦器を含む。

8.1　23ラインまで二番床を除去。本日より学生５名参加。

8.2　22ラインまで二番床を除去。23ラインを超えると半スコでバラス検出。

8.3　20ラインまで二番床を除去。

8.4　19ラインまで二番床を除去。北半では耕作溝多数検出。

8.6　17ラインまで二番床を除去。18ラインを挟んで褐色砂（南北溝）を検出。UM17区で「試掘坑」検出、石組溝の底石見えるがいつ掘られたかは不明。

8.7　二番床の除去、東端まで到達。24ラインまで写真撮影のため掃除。

8.8　24ラインの西側で写真撮影のため清掃。

8.9　写真撮影。22ライン以西・Pライン以北に分布する土層を「淡褐土」と称して除去。南半が薄く、北半は厚さ40cm。淡褐土からは黒色土器が出土。UT23区では新羅土器出土。

8.10　23-25ライン間で淡褐土を除去し、褐色土を出す。褐色土は東西畦の南側でバラス・遺物を多く含む。UU24区で検出した自然流路からは瓦器が出土し、13世紀以降のもの。

8.11　25-27間で淡褐土を除去し、褐色土を出す。褐色土からは遺物多く出土。

8.17　27-29間で淡褐土を除去。Rライン付近で石敷を検出。その直上に１層（石敷直上褐色土）あり、これを淡褐土が覆う。Sラインの北側では、淡褐土の直下に１層ありと判明。

8.18　28-29間で淡褐土を除去し、昨日に続きRライン沿いで石敷を検出。その上面の層は「石敷直上褐色土」で取り上げ。

8.20　29-31間で淡褐土除去。石敷は29ラインの西側では保存状態がよくないが、上面のレベルから第３次調査の石敷とは同一と判明。石敷より北では淡褐土の下に鉄分層があり、これを除去する

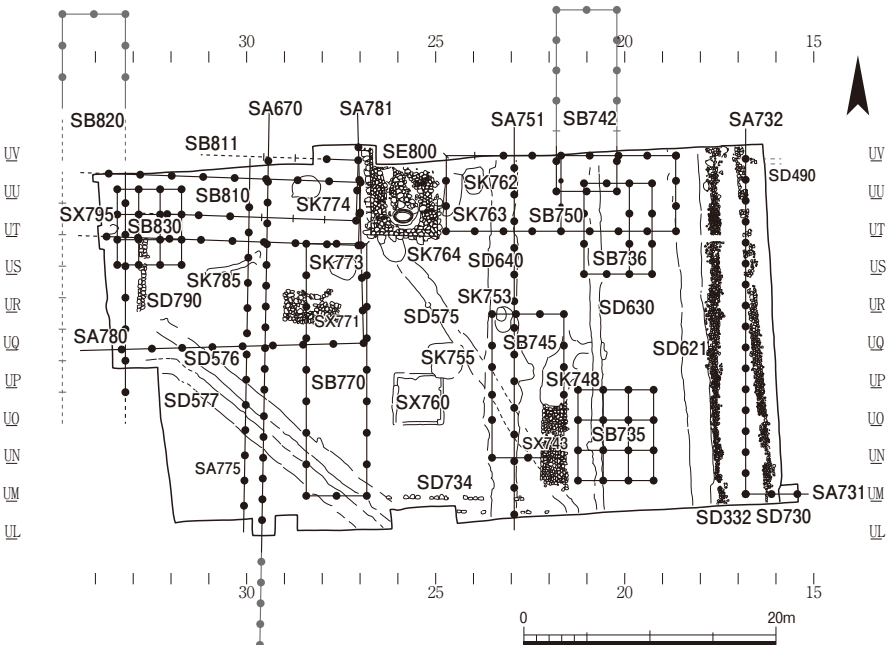

Fig. 12　第４次調査　1：600

と褐色砂質土がある。

8.21　31ラインの西側で淡褐土除去。UR33区では幅２mの石組を検出。埋土は暗褐土で、石の直上を黄色土が覆っている。

8.22　UR33・US33区で南北に延びる石列を検出（SD790）。UO32区で勾玉出土。

8.23　東端より褐色土の除去。17ラインで南北溝の東肩検出を試みるがはっきりせず。

8.24　UM・UN18区でSB735にともなう石敷を検出。その東面は揃っているが、西面はやや不規則。石敷上面には黄色土が薄く被っているが遺物出土せず。

8.25　20-21間で褐色土を除去し遺構検出。UP20区でSB735北辺の石敷を検出。

8.27　UO21区東半で褐色土を除去し、黄色土の範囲を確認。その西半では褐色土下でバラスとSB735石敷を検出。石敷を覆う黄色土がバラス下に潜ることが判明。

8.28　UO21区の石敷は幅２mで、その西側の礫敷が整地土（黄色土）で覆われていることがトレンチ調査で判明。この整地土は南北大溝（SD640）で壊されている。東西畦の北側では淡褐土直下の土層を除去し遺構検出。南側では褐色土を除去しSD640を検出。その西肩はバラスを出すことで検出した。褐色土からは黒色土器が出土。先日来検出してきた石敷は、建物を囲うものか。

8.29　24ライン付近でSD640西肩の検出を試みるが、US-UU間では検出できず。UU23・24区の北排水溝では「藤原宮期」の遺物が大量に出土。UM-UO間では石敷を検出するが、部分的に残存するのみ。

8.30　SD640の両肩を検出し掘り下げ開始。取上土層名は上から「褐色土」・「灰褐砂土」の順。北排水溝ではSD640とこれより古い土坑が重複していると判明。

8.31　SD640では「灰褐砂土」を掘り下げ。UO・UP23区ではSD640東壁に「黄色土を含む層」がある。

9.1　SD640では「灰褐砂土」の除去完了。UT・UU23区では、溝底で炭混暗灰粘質土の広がりを確認。UP・UQ24区では褐色土を除去し、焼土混じりの土坑（SK755か）を検出。

9.3　北半では褐色砂質土を除去し、US25区で「北になだらかに落ちる線」を検出[9]。南半では褐色土を掘り下げ、礫を出しながら遺構検出。UP25・UQ25区で落ち込み（SK755か）を検出。このときは「褐色土下半」で取り上げ。褐色土・褐色土下半は炭と焼土を含む。遺物はほとんどが「藤原宮期」のもの。

9.4　北半では褐色砂質土を除去し遺構検出。UU26区では灰褐粘質土を掘り下げて石敷を検出（SE800石組の石敷）。

9.5　29ラインに南北畦を設定する。UU26区では灰褐粘質土を掘り下げ、石敷を検出。UM29区付近[10]では褐色土を掘り下げ、黄褐土上面で遺構検出をおこない、一部で黄褐土を除去し石敷SX700を検出。

9.6　29ラインの南北畦東側に幅１mの南北トレンチを設け、バラス面を検出。M-P間では黄褐土を除去。29ラインの西側では褐色土を除去して黄褐土面を出す。UU28区で土坑SK774検出。遺物の時期は「藤原宮期」。

9.7　南半では褐色土を除去し、黄褐土上面で遺構検出。UU28区の土坑SK774は埋土が３層からなり、最上層は黄褐粘土。

9.8　29ライン沿いの南北トレンチでバラスを検出。Tラインの北側でゆるやかに北へ下降し、その直上に黄灰褐砂土が堆積している。

9.10　北半では排水作業。南半では黄褐土上面で遺構検出をおこない、土坑多数を検出。

9.11　北半ではUS29区の北側で褐色土を掘り下げ遺構検出。南半では29-30ライン間で黄褐土、褐色土を掘り下げ遺構検出。

9.12　29-31間で遺構検出。

9.13　UT30区にてSB811柱穴掘り下げ。埋土は淡黄灰褐砂土。UP・UQ31区では褐色土を掘り下げ、黄褐土上面で土坑多数を検出。

9.14　UP・UQ31・32区では「大土坑」を掘り上げ、黄褐土上面で遺構検出。UT33区でも黄色土を掘り込んだ柱穴を検出（SB830か）。UU33区でも「土坑」を検出し、掘り上げてから柱穴を検出。

9.17　北半では「土坑」を地区ごとに掘り下げてSB830柱穴を検出。US32区で新羅土器３片出土。

9.18　雨天中止。

9.19　北半では「土坑」の東肩を検出し、褐色粘質土を掘り下げ。あるいは地区ごとに「土坑」で掘り下げ。南半でもUO32区およびUP31・32区を「土坑」で全体に掘り下げ遺構検出。

9.20　北半ではUR31区・US30区で土坑を掘り切り東西に延びる溝を検出（SK785か）。UO32区で斜行溝SD576を検出。

9.21　「南北大溝」を掘り切り遺構検出。

9.22　「南北大溝」の底で遺構検出。

9.25　16-17ライン間で南北石組溝SD730の底石

9）このとき確認したUS25区の落ち込みは、SE800石組とほぼ重なっていることから、その埋土の一単位を指すとみられる。

10）日誌ではUM27・UN27区とあるが、平面図を見るとUL28区で検出した石敷SX700を指すとみられる。

確認。褐色砂礫・暗褐砂礫に覆われている。底石がない部分には黄褐土を含む土があり、抜取痕跡の埋土とみられる。一部に東側石が残る。

9.26　SD730底石をすべて検出。石が抜けた部分は黄褐色砂混土の柱穴埋土で、６間分を確認（SA732）。東西畦の南にも続く模様。底石は東側石の「地山」とみていたバラス層の下に潜ることを確認した。SD332を壊している「南北溝１～３（新しい順）」を検出。

9.27　「南北溝１・２」を掘り切り、UO-UQ間で「南北溝３」を掘り下げ。その結果、SD332の底石と東側石の抜取痕を検出した。その抜取痕は「南北溝３」より新しいが西側が不明瞭。底石上には灰褐粗砂が堆積し、溝埋土とみられる。

9.28　SD730を壊しているSA732柱穴を検出。UO16区より南では未検出。東西畦の北側では「南北溝１」とその下層を掘り上げ。

9.29　東西畦の北でSD332側石の抜取埋土と溝埋土とを検出。底石まで掘り下げる。

10.1　東西畦の北側ではSD332の底石と側石の抜取痕跡を検出。SD621で埋土下層のバラスを除去。UT18・UU18区でSB742柱穴３基を検出。

10.2　SD621の西側では褐色砂礫土を除去しSB742柱穴を検出。UT19区でSK741を検出。東西畦の南側では21ライン沿いで南北溝SD630を検出、本日は上層を掘り下げ。[11]

10.3　東西畦の南側ではSD630掘り下げ。北側では褐色砂礫土を除去。

10.4　東西畦の北側ではSD630を上層・下層（ニコ土・砂層）で掘り下げ。南側ではSB735西辺の石敷を覆う黄色粘土を出す。UP・UQ21区では黄色粘土を壊す土坑SK748を検出し掘り下げ中。

10.5　東西畦の北側ではSD630掘り下げ。その西側では褐色砂礫を除去し、UT22区にて柱穴１基を検出（SB750か）。南側ではSK748掘り下げ。遺物は「藤原宮期」。

10.6　東西畦の北側では21-23ライン間で精査。南側ではSK748完掘。

10.8　東西畦の北側では21-23ライン間で精査。南側では19-21ライン間で再精査。

10.9　東西畦の北側ではUT19区の土坑（SK741か）で黒色土器出土。SD630はこれより新しい。南側では石敷に囲まれた範囲で黄色土を出すが、柱穴検出にいたらず。

10.11　東西畦の北側で検出していた土坑多数は、総柱建物SB736の柱穴と考えられる。ほかにも別の建物あり。南側では黄色土とバラスを出しつつ遺構検出。

10.12　SB736は南北３間と判明。東西畦の南側では黄色粘土が詰まった柱穴を検出（SB735）。柱抜取穴か。

10.13　SD630東肩でSB736の柱穴推定位置（US20・UT20区）を精査。UU21区の柱穴はSB736柱穴より新しい（SB742）。畦南側のSB735は総柱建物か。

10.15　畦の北側ではSD630西肩でSB736・SB742柱穴掘り下げ。南側ではUM19・20区で土坑を掘り下げ、黄色粘土を含む柱穴を３基検出（SB735）。

10.16　SB736は総柱ではなく、２×３間の南北棟で東に庇ありと思われる。畦の南側ではSB735西辺石敷上の黄色粘土を除去。UO21・UP21区では黄色粘土の柱穴（SB735）を検出。

10.17　雨天中止。

10.18　UM-UQ間で南北大溝SD640の下層バラスを掘り下げ、ほぼ完掘。溝底ではUQ23区で土坑状の落ち込みあり（SK753）。

10.19　東西畦の北側ではSD640西肩で褐色土を除去し、バラス面を出しつつ遺構検出。南側では石敷の内縁に沿う溝状遺構を検出。SB735基壇側石の抜取痕跡とみられる。

10.20　東西畦の北側ではSD640のバラス層掘り下げ。南側ではSB745柱穴を検出。

10.22　SD640ではUR-UTライン間でバラスとその下位の灰褐砂礫を除去。その下層の炭混灰褐土がSB750柱穴を覆う。UU23区ではSD640の西肩を検出するため掘り下げ。

10.23　SD640ほぼ完掘。SK762とSK763との新旧関係は不明。SK755下層掘り上げ。UO24区では褐色砂礫を除去してバラスを出す。

10.24　東西畦の北側ではSB736の柱穴より古い黒褐色埋土の柱穴を検出。UVライン沿いでも柱穴検出。南側ではUP22区にて土坑掘り下げ。

10.25　黒褐色埋土の柱穴は南北３間×東西３間以上の建物になると判明（SB750）。UM24区では東西溝SD734の北側石を検出。

10.26　SB750柱穴は東から５基目まで確認。また、UO23・UP23区でもSB745西側柱を検出。

10.27　東西畦の北側ではSD640の西側で北に落ちる土層を掘り下げ遺構検出。UT24区では柱抜取穴を検出するが掘方は見えず。南側ではSD640西肩でSB745西側柱を検出、SD640より古くSD575より新しい。

10.29　東西畦の北側ではSD640東肩でSA751の柱穴５間分を検出。UU23区ではSD640底面に暗灰砂礫の堆積を確認。南側では25ライン西にて礫を残しつつ褐色土を掘り下げ。

11）同日の日誌には「この南北溝はUM20では石敷より新しく、UP20では黄色土より新しい」と書かれている。石敷はSB735の南辺石敷を指し、黄色土は北辺石敷付近にあたるので、SD630はこの建物より新しい。

10.30　バラスを出しながら遺構検出。US25区の北側では全体を「大土坑」として掘り下げ。UT25区ではこれより新しい隅丸正方形の遺構あり、その中央部に径約１ｍの落ち込みあり。その北には黄色粘土層があり、部分的に石敷が残る。

10.31　東西畦の北側では26～29ライン間で「褐色土下半」を掘り下げ、バラスを出しつつ遺構検出。南側では26ラインの西側でバラスが途切れたため、UN-UP間を「大土坑」として掘り下げ。

11.1　東西畦の北側では、26-29ライン間にてバラス・黄褐土（整地土）を壊す暗褐土（炭・焼土を含む）の広がりを「大土坑」と称して再度検出。

11.2　昨日来の「大土坑」を掘り下げるがかなり深い様子。UT29・US29区で南北塀SA670柱穴を、UT30・UT31区でSB810・SB811柱穴を検出。

11.5　SB810・SB811柱穴の検出続く。柱抜取穴は黄褐細砂（ニコ土）を埋土とするが、掘方埋土は地山との区別が難しい。

11.6　SB830柱穴２基を検出。UT33区では黄色粘土（整地土）を除去してバラスを出し、SB820の柱穴２基を検出。これらはSB830柱穴より古い。UT32区の柱穴から新羅土器出土、以前出土したものと同一個体。

11.7　東西畦の北側では「炭化物土坑」を掘り、バラス面でSB830柱穴を検出。このバラスは整地層と思われ、目地から飛鳥Ⅳの杯蓋が出土。南側では27ライン沿いでSB770東側柱４基を検出。

11.8　SB830西南隅の柱穴を検出。UT33区では土坑と「炭化物土坑」を掘り下げ、炉跡らしき遺構SX795を確認。US32区では南北に並ぶ石敷（SD790）を検出。砂層と褐色土が覆う。東西畦の南側ではSB770柱穴の検出続く。

11.9　UR32区でSD790を検出。底石上には砂層の堆積があり、その上を含炭黄灰土が覆う。その東側の黄褐粘土は側石の抜取埋土か。

11.10　US33区でバラス（整地土）を除去し黄褐粘土の柱穴等を検出。東西畦の南側ではSB770西側柱の推定位置に黄褐粘質土が広い範囲にあり、これを除去。

11.12　US27区で「大土坑」を掘り下げ、SK773とSA781柱穴（UR27区「柱穴１」）を検出。SK773は「藤原宮期」。UQ28区ではSB770とSA780柱穴の重複を確認。

11.13　東西畦の北側では、炭化物を含む汚れた土全体を「大土坑」で掘り下げ。調査区南端のUM26区にて石組溝SD734が斜行溝SD576に壊されていることを確認。

11.14　東西畦の北側では含炭褐色土と「大土坑」を除去しバラスを出しつつ検出作業。UU27・28区の北は「大土坑下半」で掘り下げ。調査区南端ではUM24区にてSD734の南側石を検出。

11.15　雨天中止。

11.16　UT27区で「柱穴１」（SA781か）と重複する「土坑４」を検出。UR28区では柱穴を検出（SB770か）。東西畦の南側では29ライン沿いで柱痕跡らしきピット５基を検出（SA670か）。

11.17　UT27区の「土坑４」は「柱穴１」より古いと判定（SB810か）。遺物多く出土し、時期は「藤原宮期」より古い。

11.19　UT27区の「柱穴１」南側でこれより古い柱穴を検出（SB811）。US26区では「大土坑」を掘り下げつつ、再び遺構検出。斜行溝SD575を壊す土坑SK764があるが、その北側が不明確。埋土は炭混じり暗褐粘質土で、掘り下げると砂層あり、その下位にバラスあり。

11.20　UT25区付近で石組を検出。南側石は東西５ｍ分。UT26区「土坑２」「大土坑」等を掘り下げるが地山は出ず、側石の掘方も見えず。トレンチを設けて側石を検出。

11.21　UT26区の「土坑２」を掘り下げ。「上層礫群」と同一面の土坑（UT25区）は写真後に掘り下げ。27ライン沿いで西側石を確認。石組内の堆積土を掘り下げ、底石を検出中だが、UT25区の「石組上土坑」で壊されている部分あり。

11.22　石組内堆積土から掘り込む土坑を掘り下げ。埋土は灰褐土で深く、井戸になる可能性あり。南北畦の東側でも南側石を３石検出。東端はなお不明。ＵＱライン沿いで東西塀SA780を検出。

11.24　（この日日誌記事なく、図のみあり）

11.26　UQ32区で「南北礫溝」を掘り、柱穴を検出（日誌記事ほとんどなく、この日の詳細不明）。

11.27　UU26区の石組では「中層礫群」まで掘り下げ、礫群の範囲を出す。東西畦の断面観察では、「土坑２」が「石組上土坑」を覆うことが判明。

11.28-11.30　現地説明会の準備。

12.1　現地説明会。

12.3　UT26区の「石組上土坑」は西半分を断ち割り。60㎝ほど掘り下げたところで井戸枠とみられる木材を検出（SE800）。一木の刳抜材か。UR21・22区の東西畦下で黒褐土混砂礫が東西に延びるのを確認、石組溝か（SD744）。北側石が３石分残る。南側石は不明だが、SD640西肩に残る１石につながるか。

12.4　UT26区の石組上土坑は、本日より「井戸」として遺物取り上げ。

12.5　UT26区の井戸SE800で写真撮影。井戸枠内には礫が投げ込まれた状態で、土師器甕など遺物多く出土（取上名は「井戸灰褐砂」）。

12.6　UU・UT25区にて南北畦撤去し、SE800石組の東側石を検出。北側では底石上まで土坑が重複している。

12.7　SE800石組内ではUU26区にて「中層礫群」

を除去し、底石および中央部の落ち込みを検出。北端には炭混暗灰褐粘質土あり。UU26区では底石直上の「中層礫群」を除去、土器細片が多数出土。

12.8　SE800石組内にてUU25区の「中層礫群」と、その直下のバラス層を除去し、黄色粘土の面を出す。

12.10　SE800石組中央部の埋土を上から山土・灰褐粘質土・灰褐砂質土の順で掘り下げ。暗灰褐砂質土の下面で底石を検出。

12.12　UU26区の「土坑３」は下層底石を壊していることを確認。その下層は炭化物を含まず、礫を投げ込んだ状態。

12.13　SE800井戸枠内で「バラス層」と「礫混砂」を掘り下げ。バラス層下部から土師器甕を中心に土器多数出土。井戸掘方をその南半で検出。UR19・20区にてSD744検出、埋土は小礫混暗褐砂。南端の拡張区ではSD734の続きを検出。

12.17　SE800井戸枠内で「含砂礫茶褐有機土」・「砂混灰褐粘質土」・「バラス混粘質土」・「灰褐砂」の順に掘り下げ。「灰褐砂」が最下層で、その下の「青灰細砂」が井戸の底にあたる。「含砂礫茶褐有機土」の下半からは完形の土器が投げ込まれた状態で出土。「砂混灰褐砂礫」で取り上げた遺物は茶褐有機土で「馬フン層」となる[12]。

12.20　写真撮影。SE800井戸枠はスギ材で、二材からなると判明（光谷拓実氏）。

1.18　方形溝SX760の西北隅から釘出土、木質部も残る。30ライン沿いで南北塀SA670を検出。柱痕跡には黄色土が混じる。

1.21　SB770とSA781との重複部２ヵ所で断ち割るも、どちらも１基の柱穴に見えるため再検討を要す。SE800南側石の掘方を断ち割り。斜行溝SD575一部掘り下げ。

1.22　柱穴断ち割り。

1.23　SB736・SB750・SA781等の柱穴断ち割り。UR32・US32区では「上層礫敷」を除去し、石組溝SD790と、北から続く黄褐土の柱穴（SB820）を検出。

1.24　33ラインの柱穴は南北６間分を検出（SB820）。UR33区のそれはSD790西側石の抜取痕跡より古い。

1.25　UR33区でSB820柱穴を確認、その直上を黄褐土が、さらにその上を含炭褐色土が覆うことを確認。Ａ期の建物と考えられる。SD790はその東を区画する溝か。

1.26　（この日記事とくになし）

1.28　（この日記事とくになし）

1.29　（この日写真貼付のみ）

2.1　調査区西南隅にてSB820柱穴を検出、斜行溝SD577より新しいことを確認。東南隅付近ではSA732柱穴４基を検出。

2.2　SB750東南隅の柱穴断ち割り。

2.5　（この日日誌記事なく、写真貼付のみ）

2.6　SB800石組の西側石から西へ延びている石列を検出。西側石から３ｍほど西で北に折れている模様。

2.7　SA781柱穴等断ち割り。（写真貼付のみ）

2.8　UU27区で南北塀SA781に壊される柱穴あり（SB811）、柱痕跡には黄色粘土が詰まる。SE800石組より古い柱穴あり（SB810）。

2.9　SB811柱穴断ち割り（写真貼付のみ）。

2.12　SE800石組の底石抜取穴（UU25区）から新羅土器出土。

2.13　空撮と写真撮影。

2.14　UT26区にて南北塀SA751に壊される柱穴を検出（SB810）。柱掘方のプランは整地土およびSE800石組の側石掘方埋土に覆われている。

2.18　（写真貼付のみ）

2.25　（写真貼付のみ）

2.27　SB745・SA751柱穴断ち割り。

2.28　調査区西北隅にて「バラス整地層」の上から掘り込んだ柱穴を検出。埋土が黄褐色山土の柱穴と一連のものか。「バラス整地層」の下位でSB810を検出。南北棟SB820は整地後に建てている。

3.2　（写真貼付のみ）

3.4　SA732柱穴断ち割り。（写真貼付のみ）

3.5　（写真貼付のみ）

3.6　（写真貼付のみ）

3.7　UU27区で調査区を北へ拡張し、SE800石組の側石を覆う土坑２基を確認。それぞれ「西土坑」「東土坑」として掘り下げ。28ライン沿いで側石３石をさらに確認。

3.11　SE800石組の西側石が西へ折れているのを確認。底石は土坑で壊されているが、SB811柱穴を検出。UT24区では、SE800石組の東側石掘方がSB750柱抜取穴を壊していることが判明。

3.12　（写真貼付のみ）

3.16　（写真貼付のみ）

3.18　（写真貼付のみ）

3.20　（写真貼付のみ）

3.22　（写真貼付のみ）

4.25　（写真貼付のみ）

4.1　考古第一研究室に埋め戻し引き継ぎ。

5.2　埋め戻し完了。

5.7　撤収完了。

12）これは同日に「砂混灰褐砂礫」として取り上げた遺物が「含砂礫茶褐有機土」に包含されていたもので、後者とあわせて「馬フン層」、つまり腐植性の泥炭質土にあたるという意味かとみられる。

E　石神遺跡1990-１次調査　1991年１月28日～1991年２月15日

1.25　申請者の大鳥氏・村教委立ち合いのもと、調査区の縄張り。農小屋を含む範囲を調査区とする。

1.28　機材搬入のち、耕作土・床土掘削開始。

1.29　耕作溝の検出と掘り下げ。西半では暗褐色土の除去にかかる。

1.30　南北溝SD1463と、調査区南半で「東西溝」を検出。

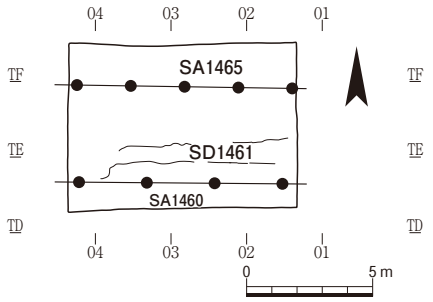

Fig. 13　石神遺跡1990-１次調査　1：300

1.31　東西塀SA1465の柱穴４間分を検出。

2.1　「東西溝」南肩確認のため、調査区を南へ0.5m拡張。SA1465の柱間は2.1m。

2.2　南北溝SD1463（中世）掘り下げ、SA1465はこれより古い。「東西溝」の東端で断ち割り。

2.4　「東西溝」の南端に山土混褐色土で埋めている部分がある。

2.5　「東西溝」東端の断割で柱穴を確認したため、同溝を黄褐色砂質土まで掘り下げて東西塀SA1465を検出。

2.6　SA1465柱掘方４基と柱抜取穴を検出。

2.7　農小屋の位置が変更になったので、その基礎に合わせて調査区を北へ１m拡張することに。

2.8　写真撮影。その後、貫板の打設と水糸配り。

2.12　実測作業。

2.13　柱穴の断割作業。

2.14　砂撒きと埋め戻し作業。

2.15　埋め戻し完了。

F　飛鳥藤原第214次調査　2023年12月６日～2024年３月15日

12.6　重機掘削開始。発電機・コンベヤ・テント等を搬入。東隣の県有地（飛鳥302番地）を土置き場とし、耕作土と第１次調査時の埋戻土とは別置とする。第１次調査時の撒き砂は真砂土と判明。

12.7　耕作土の除去完了し、埋戻土の除去にかかる。同日、豊田宅の鑿井工事にともなう掘削範囲の縄張り。

12.8　調査区の南辺で埋戻土の除去が終わり、作業員が真砂土まで掘り下げ。SD330・SD335の側石を確認。

12.11　引き続き重機掘削。西北部は埋戻土に礫多く、深い。

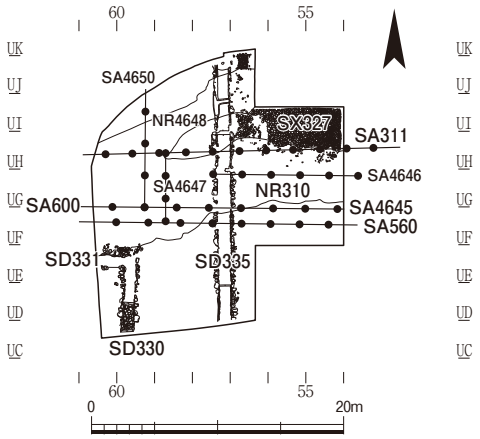

Fig. 14　飛鳥藤原第214次調査　1：600

12.12　雨天中止。

12.13　調査区西側の埋戻土はほぼ除去。SD335の側石天端とSX327との間に段差あり、重機掘削では要注意。

12.14　森川・福嶋は豊田宅で鑿井工事の立会（飛鳥藤原第215-１次）。重機掘削は東側の張り出し部のみとなる。

12.15　森川は豊田宅にて立会。扇状地の基底礫層を深く掘り込んでいる。湧水は現地表下約６m。重機掘削は調査区の東北隅のみが残る。

12.18　重機掘削は午前中で完了。午後、コンベヤ設置。夕方、関本氏と埋め戻しの段取りについて打ち合わせ。

12.19　SD335側石の天端を露出させ、南から真砂土の手掘り除去にかかる。

12.20　SD335側石およびSD330・331側石の頭出しと、真砂土の除去。両石組溝の据付掘方を確認。

12.21　引き続き真砂土の除去。UF58・59区に東西方向のトレンチ跡あり、SB325[13]が西へ延びるかを確認するための断割か。UG59区付近でSA600柱穴の検出を試みるも未完、埋戻土・真砂土まだ残るため。

12.22　真砂土除去と遺構検出。SE340の北側想定位置で柱穴らしきものを確認、SA600か。58ライン以西ではSA560・SA311らしき柱穴も検出。

12.25　SD335西側の真砂土除去終わる。SD335

13）第１次調査で検出した「建物SB325」は、第214次で再検討した結果、東西塀SA4646として再認識したが、その調査日誌ではまだ「SB325」と記してある。

Fig. 15　住民への説明会（2024年２月29日）

Fig. 16　現場見学会（2024年３月２日）

西側（UJ・UK57区）にはＡ期整地土が残るか、SX327と同じ高さ。

12.26　SX327上の真砂土除去終わる。SB325北側柱の柱穴には赤褐色の粘土ブロックと炭が含まれる。SX327南辺近くではSA311柱穴の検出が難航、とても難しい。UGラインの北側では砂利層を確認、第１次調査の「１礫」にあたるか。NR310の堆積物が残っていると思われる。

1.10　調査区西半南側から遺構検出にかかる。NR310の堆積物が５㎝厚で残っており、その下位で確認できた柱穴は、SA600東延長部にあたると考えられる（UG54・55区）。この東西塀はUG59区で北へ折れ、かつ東へも延びているのでT字形となる。第１次調査で検出した「SB325」の柱穴は北側柱と南側柱とで埋土が全く異なるため、別の遺構にすべきか。

1.11　調査区東半ではNR310の掘り残し範囲を確認。UD・UE間には黄褐色の砂質土が広がり、流水にともなう堆積物とみられる。UE58区にも砂礫層あり、これらもNR310の堆積物であろう。

1.12　UG54・55区付近においてNR310堆積物を「灰色砂礫」と称し除去、奈良時代の土器出土。

1.15　UG55・56区と、SD335の西側とで「灰色砂礫」の除去。SD330の東側では、その東側石にぶつかって堆積した砂礫層が厚く残るようである。UFライン以南の砂礫層はそのままとし、SA600柱穴の検出を進めることに。

1.16　NR310の掘り残し部分を「東西礫溝」として除去し、UG55・56区でSB325柱穴を再検出。しかし、NR310の砂礫層にまだ覆われており、全容はわからない。

1.17　56ラインの東側で「灰色砂礫」を除去し、SB325柱穴を検出したが、SA600東延長部の柱穴はよく見えない。UF57区の土坑は石田茂作のトレンチ跡と判明したので掘り下げ。SE340付近でも「灰色砂礫」を除去し、SA600柱穴を検出。

1.18　雨天中止。

1.19　UG54区東端でSA4645の柱穴を確認。UH57・58区では「灰色砂礫」を除去し、SA311柱穴を２基検出。UH59区でもSA4645柱穴を再確認したが、全体は見えず。UF59・60区のSA560柱穴は非常に見にくい。UG58区では南北に並ぶ柱穴２基を検出。

1.22　UG59区でSA600柱穴の掘方を検出、砂礫層の地山に掘り込んでいる。その抜取穴は「井戸」またはSE340として、以前の調査で掘り抜いている。UF59区のSA560柱穴は抜取穴が見えていたが、掘り下げるとはっきりしない。UF57区のSB325柱穴埋土には粘土ブロックが入らない。UF・UG58区で新たに検出した柱穴は1.8m等間。抜取穴埋土には黄色粘土ブロックが含まれる。

1.23　UG56区でSA4645の柱穴を検出。UG56区ではSB325北側柱穴の周囲で「灰色砂礫」を除去。

1.24　調査区東半で遺構検出。UG55区でSA4645の柱穴を検出したが、北半はNR310の砂礫層で見えず。56ライン沿いの南北断割ではSA311柱穴がかかるはずだが確認できず。UI56区では、SD335東肩に昭和11年調査の埋戻土を見つけたので掘り下げ。

1.25　56ライン東側の南北断割を拡幅し、地山の砂礫層まで掘り下げたところ、NR310の砂礫層でSA4645の柱穴が覆われていることを確認。SX327南端の敷石は、昭和11年調査のときに乱された部分がある模様。

1.26　UI56区の南北断割では、UHライン北側に残る黄褐色土が、削剥を受けたNR310砂礫層の上に堆積しているのを確認した。このためその上面では、SA311柱穴等は検出できないことが判明。黄褐色土は本来、SX327を覆っていた新しい土層と考えられる[14]。

14）この日以前は、SX327の南側に分布する黄褐色土は「Ａ期整地土」に相当すると考え、その上面で東西溝SD347やSA311柱穴の検出を目指していた。しかしながら、黄褐色土がNR310埋積後の堆積物であることが同日判明したため、この土層はSX327を被覆していた「黄褐色土」（第２次調査）と同一層であるとの認識をもつにいたった。

1.29　写真撮影に向けて清掃。
1.30　本日も清掃。コンベヤや道具は水田の東端へ片付け。
1.31　写真撮影は午前中で完了。午後はsfM写真撮影を終え、実測作業のための釘撤きも終えたところで降雨。
2.1　水糸を張り実測開始。SD335の北端と南端で埋戻土を除去し、北端では第１次調査時の溝断面を出す。また北壁を押し、第１次調査時の北壁を露出させたが、実際の土層断面と、当時の土層図とはかなり異なることが判明。
2.2　SX327の敷石部分は、sfMオルソ画像から書き起こして作図。その他は現場で実測。作業員はSD335埋戻土の掘り下げ。第１次調査時の北壁で分層し、基本層序を確認。
2.5　雨天中止。
2.6　排水作業ののち実測作業。
2.7　実測作業ほぼ完了し、レベル記入開始。朝日新聞・毎日新聞記者来跡、夕刻本中所長・今井部長らに説明。
2.8　実測図へのレベル記入終わり。午後、高橋克壽氏（花園大）の立ち寄りあり。
2.9　総合研究会開催のため現場休み。
2.13　排水作業ののち、柱穴の清掃と断割トレンチの設定。
2.14　SD330・335間において、UDライン沿いに東西断割を、59ライン東側にも南北断割を設け、NR310由来とみられる砂層を掘り下げ。10：30より検討会、遺構の解釈について部員同意。
2.15　昨日の断割を掘り下げ。UF57区の攪乱坑側面に、SA4645の柱穴が辛うじて残るのを確認。午後、諫早直人氏（京都府立大）ご一行らが来跡。村田泰輔（埋文センター）によれば、SD335溝内の砂層は恒常的な流水がもたらした堆積物であるという。後日、土壌サンプルを採取することに。小澤毅氏（三重大）も来跡。
2.16　10時に橿考研ご一行の現場見学。石組溝の底石の有無は、宮殿の内側・外側のちがいを示すのでは、との意見あり。調査区北西部では検討会の指摘により礫層を除去。UG59・UH59区では、SA600柱穴内の埋戻土を除去し掘り下げ。58ラインの南北断割ではNR310の断面を確認、SD347は削られていて残らない模様。UH56区の南北断割も掘り下げ。午後、SD330・335の写真撮影。
2.19　UL59区では礫層を除去した結果、SA600柱穴掘方がひと回り大きくなった。UH56区の断割ではSA311柱穴を確認。午後、庁舎にて記者発表資料の読み合わせ。産経新聞・NHK記者来る。
2.20　調査区北西部で礫を除去したところ、SA600南北部分の柱穴が軒並み大きくなる。径1.5～2.0mで。大垣に相応しい大きさ。UH56区の断割ではSA311柱穴を確認したものの、SD347は確認できない。
2.21　雨天中止。記者発表資料を仕上げる。
2.22　UG60区ではSA600柱穴周辺で礫を除去し、地山を壊す大きな掘方を確認。掘方埋土には礫や粘土ブロックが、抜取穴埋土には黄色粘土ブロックが含まれる。 UG58区でもSA4645の柱穴を探すが未完。共同通信記者来る。
2.27　SA600柱穴の掘り下げ完了。SD335では溝埋土を切り直し、上から順に遺物取り上げ。朝日・毎日・奈良新聞の各紙記者来る。青木敬氏（國學院大）、学生２名引率で来跡。石組溝の側石や柱穴の深さなどについて、ご意見をうかがう。
2.28　記者発表前の清掃完了し、コンベヤも撤去了。産経新聞記者来跡。
2.29　10時より庁舎にて記者発表。11～12時、現場を記者に公開。午後は断面図を作図するも、15時からの雨で作業中止。
3.1　朝から排水作業。明日予定している写真撮影部分を中心に掃除するも、現地見学会の設営はほとんどできず。13時半から大字飛鳥の住民向け見学会を実施、27名の参加あり。
3.2　10時45分から15時まで、現地見学会を開催。午前中は福嶋が、午後は森川が解説を随時おこなう。来場者数は805人、同日開催の本薬師寺の見学会（橿原市）との相乗効果。
3.4　SD335北端の溝埋土にて土壌サンプル採取（村田泰輔）。小谷徳彦氏（甲賀市）・小田主任研究員が見学。本日、砂撒き完了。
3.5　雨天のため埋戻作業を順延。作業員は休み。
3.6　排水作業をおこない、10時から埋め戻し開始（関本氏）。作業員は排出土のシート除去と機材等撤収。287番地に置いてあった土はすべて埋め戻し、302番地の土も運び始める。
3.7　埋め戻し続行、遺構面が埋まり１回目の填圧をおこなう。
3.8　埋め戻しと発電機・ノッチタンクの撤収。
3.11　埋め戻し４日目。
3.12　雨天のため埋め戻し中止。
3.13　埋め戻し５日目、午後からは耕作土の搬入にかかる。作業員は本日まで。
3.14　埋め戻し６日目。302番地に残置していた耕作土はすべて、287番地に搬入し終え、重機進入路の鉄板も撤去済。午後には埋め戻し了、畦塗りも済んだ。
3.15　重機で水田面を均す作業を15時頃までおこない、重機・キャリア撤収。午後、飛鳥総代・島田氏と辻本佳央氏に埋め戻し完了を報告。